



# 金沢市下安原海岸遺跡

—金沢海岸災害復旧工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

1997

石川県立埋蔵文化財センター



道跡と金沢海岸(北から松任方向)



調査区全景(北から)

## 下安原海岸遺跡の発見と海浜遺跡の崩壊(序に替えて)

下安原海岸遺跡の発見は、昭和44(1969)年3月のことであった。石川県が市内専光寺浜で、プールなどを主体とした「石川県健民センター(健民海浜公園)」造成計画を公表したのは前年のことであったが、専光寺・普正寺・浜安原などの海岸は、かつての粟崎・大野・大根布・大崎・白尾などの海岸と同様に、砂丘下の黒色土(クロガケとも呼ばれる)より、土器・石器などが出土するものと予想された。建設計画を知った石川考古学研究会会員の有志は、まだ冬の大潮が打ち寄せる海岸を踏査し、下安原の海浜で土器片などの点在を確認したのであった。

この辺りの海岸は、夏季と冬季との様相が全く異なった景観を見せていた。夏を中心とした時期には、かなりの砂が海浜を覆って、穏やかな表情を呈するが、冬季には砂はほとんど洗い流され、この浜では比較的堅い草炭層と黒色土層が露呈、人を寄せつけない荒々しい景観となる。その黒色土の中に弥生時代中・後期遺物を包含するのであり、このような土塊が波浪の直撃を受け、次々に海中にさらわれ、さらには砕け散るのである。私が始めてこの遺跡を訪れたのも、まさにこの様な厳しい状況にあり、波飛沫を浴びながら自然の驚異的な力を見せつけられたのであった。この時期にはまだ汀線前面に消波ブロックは設置されてはいなかった。

幸いなことに、健民センターの建設地から2km程離れており、建設工事により破壊されることは避けられたが、冬季波浪による遺跡破壊という現実と直面する事態となったのである。石川考古学研究会は県教委と金沢市教委に実情を訴え、遺跡の状況を把握するための発掘調査の実施を求め、市教委から10万円の補助金交付を得て10日間の発掘を行ったのは、昭和45年(3月27日～4月5日)のことで、これが当遺跡における第1次調査(調査団長 秋田喜一)となった。検出した遺構には井戸跡や小規模貝塚などがあり、弥生中期土器や終末期(月影期)土器の出土からおおむね2時期にわたることが判明、打製石斧・砥石・軽石片・石鏃・銅鏃・管玉・円未成品なども検出し、砂丘下に広がる大規模な集落遺跡を確認したのである。

長い海岸線を擁する石川県には、海岸に立地する遺跡も少なくない。能登半島の海浜部には多数の土器製塩遺跡が点在しており、これまでに消波ブロックの設置や人工海岸造成によって壊されたものも少なくないと考えられる。一方、加賀地方の海浜近くにも幾多の遺跡が発見されており、加賀市には片野・美岬・千崎・塩浜などの海岸、根上町の加賀舞子遺跡、松任市では徳光・相川新海岸や倉部川河口付近にも遺跡がある。金沢市では打木から大野・粟崎海岸にかけて厚い砂丘の下に、まだまだ未知の遺跡が眠っている可能性が指摘されている。とくに松任市から内灘町に至る海岸部での遺跡は、その埋積状況が下安原海岸遺跡と共通するものが多いとも考えられ、事実、時期的にも弥生時代を中心とするものが多く、また稲作を主体とする農耕文化の黎明期の様相を示す遺跡が点在する。つまり海浜遺跡や砂丘遺跡には、北陸地方への農耕文化波及期の姿相をとどめる貴重な遺跡を含むことになる。

現在、加賀地方の海岸を中心に急速に侵蝕が進行している。かつての美しい砂浜はその幅を狭め、消波ブロックなどの設置箇所が次第に延長されているとの印象を受けている。そのこと自体は、国土・県土の保全から必要だと考えるが、埋蔵文化財の保護に携わる私たちとしては、やはり海浜・砂丘地に立地する諸遺跡に対して、より関心を深めその観察を進めることが必要であろう。下安原海岸遺跡の発見と調査の歴史は、遺跡とその自然破壊を示すまさにシンボリックな存在なのである。

所長 橋本 澄夫

## 例 言

- 1 本書は石川県金沢市下安原町地内に所在する、下安原海岸遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 下安原海岸遺跡の発掘調査は、石川県土木部河川課所管の金沢海岸災害復旧事業の施工に起因するもので、石川県金沢土木事務所の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査に係る費用は石川県土木部河川課が負担した。
- 4 現地調査から出土遺物整理、報告書刊行に至るまでには下記の機関、個人の協力を得た。  
文化庁記念物課、石川県土木部河川課、石川県金沢土木事務所、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会、金沢市教育委員会、石川考古学研究会、株式会社太陽測地社、株式会社パレオ・ラボ、セントラル航業株式会社、日本海建設株式会社、新山雅広、小島和夫、小西昌志、高橋 裕、藤 則雄、鈴木三男、平口哲夫、南木睦彦（個人名五十音順、敬称略）
- 5 発掘調査は平成7年度から平成8年度にかけて実施しており、調査担当、調査面積、各年度の内容、費用は下記の通りである。

調査担当	石川県立埋蔵文化財センター 主事 端 猛、同 安 英樹
調査面積	約680㎡
調査内容	平成7年度 現地調査、出土遺物整理、自然科学的分析 費用 13,200,000円 平成8年度 自然科学的分析、報告書作成・刊行 費用 1,845,000円
- 6 出土遺物の整理については、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に作業を委託して行った。
- 7 本報告書の作成にあたっては、各種の自然科学的分析を実施しており、藤則雄（金沢大学）、鈴木三男（東北大学）、平口哲夫（金沢医科大学）、新山雅広（パレオ・ラボ）各氏には分析成果についての玉稿を賜った。
- 8 本報告書の執筆は、M1を藤則雄氏（金沢大学）、M2を平口哲夫氏（金沢医科大学）、M3を鈴木三男氏（東北大学）、M4を新山雅広氏（パレオ・ラボ）、I・IIを端、その他を安が行なった。写真図版の作成は端と安が行い、編集は安が行なった。
- 9 本文・図版・挿図についての凡例は下記の通りである。
  - (1)方位は座標北を指し、座標は国土座標第Ⅶ系に準拠している。(2)水平基準は海抜高で示している。
  - (3)挿図の縮尺は図内に示した。(4)土層図・断面図について、基盤層（地山）を万線で示した。(5)出土遺物番号は挿図・図版で共通している。(6)遺物挿図について、土器の赤彩、軽石の摩擦は淡い網掛けで示し、特徴的な煤の付着は濃い網掛けで示し、石の板状節理は万線で示した。
- 10 発掘調査で得られた記録資料、出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

# 目 次

## 報告書抄録

I	位置と環境	1
1	遺跡の位置と周辺の地形	1
2	周辺の遺跡	1
II	経緯と経過	5
1	既往の調査	5
2	発掘調査に至る経緯	7
3	現地調査の方法と経過	8
4	屋内整理	9
III	調査の概要	11
1	層序と微地形	11
2	遺構と遺物	11
3	補 足	11
IV	遺 構	14
1	各 説	14
2	小 結	14
V	遺 物	18
1	土器・土製品	18
2	石器・石製品	31
3	木器・木製品	34
4	生物遺体	41
5	小 結	48
VI	自然科学的分析	49
1	下安原海岸遺跡の花粉分析に基づく古環境解析	49
2	下安原海岸遺跡出土の動物遺体	60
3	下安原海岸遺跡出土木材の樹種	63
4	下安原海岸遺跡の植物化石	69
VII	まとめ	74
1	発掘調査成果の要約	74
2	下安原海岸遺跡の変遷	75

# 写真図版目次

巻頭図版 上 遺跡と金沢海岸（北から松任方向）	図版 9 下位遺物包含層・炭化物層出土土器
下 調査区全景（北から）	図版10 上位遺物包含層出土土器（1）
図版 1 調査区全景（垂直）	図版11 上位遺物包含層出土土器（2）
図版 2 上 遺跡と金沢海岸（南から内灘方向）	図版12 上位遺物包含層出土土器（3）
下 調査区全景（南から）	図版13 上位遺物包含層出土土器（4）
図版 3 上 河川（東から）	図版14 上位遺物包含層出土土器（5）
中 河川東壁土層断面（西から）	図版15 その他土器・木器・木製品
下 河川（西から）	図版16 石器・石製品（1）
図版 4 上 河川層打製石斧出土状況（南西から）	図版17 石器・石製品（2）
中 土坑土層断面（西から）	図版18 石器・石製品（3）
下 土坑完掘（北から）	図版19 動物遺体
図版 5 上 1号溝（西から）	図版20 木材試料顕微鏡写真（1）
中 2号溝（西から）	図版21 木材試料顕微鏡写真（2）
下 4号溝（北から）	図版22 木材試料顕微鏡写真（3）
図版 6 上 3号溝（西から）	図版23 木材試料顕微鏡写真（4）
中 3号溝周辺土層断面（南西から）	図版24 大型植物化石（1）
下 3号溝（東から）	図版25 大型植物化石（2）
図版 7 土坑・3号溝出土土器	図版26 大型植物化石（3）
図版 8 河川出土土器	

## 報告書抄録

ふりがな	かなざわししもやすはらかいがんいせき							
書名	金沢市下安原海岸遺跡							
副書名	金沢海岸災害復旧工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	新山雅弘、鈴木三男、平口哲夫、藤 則雄、端 猛、安 英樹							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	石川県金沢市米泉町4丁目133番地 TEL 0762-43-7692							
発行年月日	平成9年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	…	…		(㎡)	
下安原海岸遺跡	石川県金沢市 下安原町地内	17201	037	36度 34分 32秒	136度 34分 14秒	19950508～ 19950726	680	金沢海岸 災害復旧 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下安原海岸遺跡	集落	弥生	土坑1基 溝4条 河川1条	土器・土製品 石器・石製品 木器・木製品 生物遺体		弥生時代の集落が砂 丘下に埋没し、良好 に遺存している。今 回の調査区は集落の 縁辺部に相当する。		

# I 位置と環境

## 1 遺跡の位置と周辺の地形

下安原海岸遺跡は金沢市の市街地から西に約8km離れた海岸部に位置する弥生時代の集落跡である。

金沢市は石川県の県庁所在地で、北陸の中心都市である。日本海に突出する能登半島を擁する石川県は日本列島のはぼ中央に位置し、地形的には丘陵状の台地が海岸線のすぐ近くまで迫る能登と白山山系の急峻な山々とそこを源とする河川が形成する扇状地・沖積平野が広がる加賀に分けることができる。能登半島の付け根から加賀にかけての海岸線は砂丘地帯を形成しており、能登の羽咋砂丘などでは内列、中列、外列砂丘の三横列砂丘に区分することができる。また、日本屈指の砂丘である内灘砂丘ではそれらの横列砂丘が累積しており、頂部では標高60m余りを測る。内灘砂丘の南方に安原砂丘が位置し、当遺跡の大部分は厚い砂に覆われている。



第1図 金沢市の位置

各砂丘の形成過程については過去の地質学的研究により示されており、安原砂丘についてもその形成時期は古墳時代に求められている。なお、当遺跡周辺も含めた古環境の解析についてはⅡ1に詳しい。

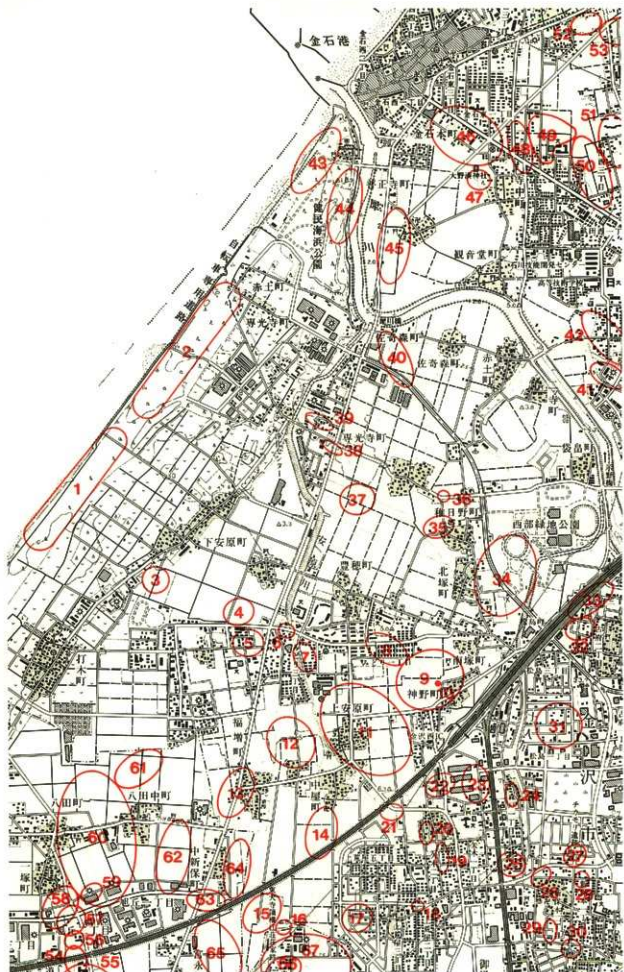
安原砂丘の後背地には金沢平野が広がる。金沢平野は南東部の山地から流れ出るいくつかの河川が北～西流して形成された複合扇状地である。市の中心部では犀川と浅野川がほぼ並行して流れており、俗に犀川は男川、浅野川は女川と愛称され、古くから人々の生活と深いつながりがある。これらの河川は太古より幾度も流路を変えており、近現代に度重なる改修を受け現在の流路となっている。同時に、かつては島状高地や小河川が複雑に入り組む変化に富んだ地形であったが、耕地整理等により改変され、現在見られる平坦な土地となった。

また、白山山系から流れ出る県下最大の河川、手取川の作り出す広大な扇状地の北扇端部にも位置する遺跡周辺は、かつてはよく知られた伏流水の自噴地帯でもあった。安原砂丘の裾を流れる安原川はそれら伏流水が砂丘に流れを遮られ一つになったもので、北東流し犀川と合流して日本海へと注いでいる。

## 2 周辺の遺跡

海岸線から10km前後内陸まで標高が10mに満たない金沢平野では、遺跡の立地は各時期の海水面の変動に影響を受けたようである。一般には縄文時代前・中期には気候が温暖になり海水面が上昇し、ピーク時には現標高約5m以下(現汀線から約5km前後内陸)まで水面下であったと考えられている。また、縄文時代後・晩期から弥生時代にかけては気候が冷涼になり海水面が下降し、ピーク時には現水深2m以内(現汀線から約1km沖合)まで陸地であったと考えられている。ただし、最近の発掘調査により金沢平野でも標高5m以下の低地に縄文時代前期の遺跡が存在することが確認されており、単純に





第2図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺の遺跡名

照清跡番号	遺跡名	類別	時代	備考	
1	1037	下安原海岸遺跡	築基跡	縄文～古墳	1987年県埋文センター発掘調査
2	1038	専文寺海岸遺跡	散布地	奈良～平安	
3	1039	下安原遺跡	瓦葺跡	縄文～古墳	
4	1040	安原工業団地B遺跡	散布地	縄文・中世・近世	1986、88年市教委発掘調査
5	1041	安原工業団地A遺跡	築基跡	弥生～平安	1982年市教委発掘調査
6	1042	緑岡地下水池見場遺跡	散布地	弥生・室町	1975年市教委発掘調査
7	1043	緑岡公園遺跡	散布地	古墳・平安	
8	1044	上安原緑岡地遺跡	散布地	弥生・古墳	
9	1045	南塚遺跡	散布地	縄文・古墳	
10	1046	ワタ塚古墳	古墳	古墳	1976年市教委測量調査
11	1047	上安原遺跡	散布地	縄文・弥生・古代・中世	1985、90年市教委発掘調査
12	1048	中原ヘンタ遺跡	散布地	弥生・奈良～中世	1990年市教委発掘調査
13	1049	堀端遺跡	散布地	不詳	
14	1050	中原遺跡	散布地	縄文晩期	1979、80年市教委発掘調査
15	1051	下堀端遺跡	散布地	縄文～古墳	
16	1052	中原ツツ遺跡	築基跡	縄文・中世	1990年市教委発掘調査
17	1053	上安原遺跡	築基跡・柱礎	縄文・平安	1987～91年市教委発掘調査 市指定史跡
18	1055	上安原住宅遺跡	雑巾地	弥生	
19	1056	矢木マツノキダ遺跡	築基跡	弥生・古墳	
20	1057	矢木ヒガシウラ遺跡	散布地	弥生・古墳	1983年市教委発掘調査
21	1058	上安原跡編遺跡	散布地	弥生・古墳	
22	1059	矢木シロリ遺跡	散布地	弥生・古墳	1985年市教委発掘調査
23	1060	森戸パイパス遺跡	散布地	古墳	
24	1061	森戸本町遺跡	散布地	縄文	
25	1062	森戸住宅遺跡	散布地	縄文	
26	1063	新保本町西遺跡	築基跡	弥生・古墳	1979、90年市教委発掘調査
27	1064	新保本町カセリ遺跡	築基跡	縄文晩期	1980年市教委発掘調査 市指定史跡
28	1065	新保本町東遺跡	築基跡	縄文・古墳	1979、88年市教委発掘調査
29	1066	新保本町ツカダ遺跡	散布地	弥生	
30	1067	新保本町南遺跡	散布地	中世	
31	1081	松島オオヤカ遺跡	散布地	平安～中世	
32	1083	古府日遺跡	散布地	不詳	
33	1084	古府タビ石遺跡	築基跡	弥生～平安	
34	1085	妙まる塚古墳	古墳	古墳	1972、74、82、83年調査団、市教委発掘調査
	1086	塚生神社古墳	古墳	古墳	1976年市教委測量調査
	1087	北塚古墳群	古墳	古墳	
	1088	北塚遺跡	築基跡	縄文・弥生・平安・中世	1973、83年市教委、県埋文センター発掘調査 1972、73、75、79、83、84、85、96年市教委、県教委、 県埋文センター発掘調査
35	1089	権日野遺跡	散布地	縄文・古墳	県埋文センター発掘調査
36	1090	御前前遺跡	散布地	不詳	
37	1091	吉原専文寺跡	寺院跡	室町	
38	1092	専文寺残瓦場遺跡	散布地	古墳～平安	
39	1093	専文寺後池地遺跡	散布地	古墳	1990年市教委発掘調査
40	1094	佐倉森遺跡	築基跡	弥生・平安～近世	
41	1096	松村のまき遺跡	散布地	弥生中期	1989年市教委発掘調査
42	1096	松村A遺跡	散布地	縄文・古墳・中世	
43	1253	曹正寺番屋砂丘遺跡	散布地	縄文・奈良～平安	
44	1254	曹正寺遺跡	築基跡・墓址	鎌倉・室町	1982年県埋文センター発掘調査
45	1255	曹正寺高島遺跡	築基跡	古墳晩期・鎌倉	1990年県埋文センター発掘調査
46	1256	金石本町遺跡	築基跡	弥生～平安	1979、80、86、88、93、95、96年市教委、県埋文センター発掘調査
47	1257	寺中御台輪遺跡	塚跡	近世	
48	1258	寺中遺跡	散布地	弥生中後期	1974、75年市教委発掘調査
49	1259	寺中B遺跡	築基跡	縄文晩期～平安	1979、80、88～91年市教委、県埋文センター発掘調査
50	1260	歌田・寺中遺跡	散布地	古墳～中世	1982年市教委発掘調査
51	1261	歌田遺跡	築基跡	縄文晩期～平安	1985～87、89年市教委、県埋文センター発掘調査
52	1278	柿遺跡	散布地	弥生・古墳・中世	1981年県埋文センター発掘調査
53	1279	舞臺寺月遺跡	築基跡	古墳	1976、82、83、85年市教委発掘調査
54	8121	宮水遺跡	散布地	古墳	1969年北陸自動車道発掘調査出一部調査、1983年県埋文センター発掘調査
55	8122	宮水B遺跡	散布地	縄文・古墳・中世	
56	8123	旭小学校遺跡	築基跡	弥生・古墳	1987、90年市教委発掘調査
57	8124	一塚オオミナチ遺跡	築基跡	弥生後期	1984、86、96年市教委発掘調査
58	8125	一塚遺跡	築基跡	縄文晩期	1985年県埋文センター発掘調査
59	8126	一塚墳墓・古墳群	墳墓・古墳	弥生後期・中世	1989年市教委発掘調査
60	8127	八田小遺跡	築基跡	弥生	1987年市教委発掘調査
61	8128	八田中遺跡	築基跡	縄文～古墳	1985、86年県埋文センター発掘調査
61	8129	八田中中村遺跡	築基跡	近世	
62	8130	八田中ヒュンダ遺跡	築基跡	縄文・弥生・中近世	1984年市教委、85、88年県埋文センター発掘調査
63	8131	八田中アレチ遺跡	散布地	縄文・弥生	1987年県埋文センター発掘調査
64	8132	中瀬遺跡	散布地	不詳	
65	8133	下堀端遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良～平安	1986、89年県埋文センター発掘調査
66	8134	塚生寺遺跡	柱礎・柱家	平安	1970、78～91年調査、区埋調査 市指定史跡
67	8135	築基遺跡	柱礎	奈良～平安	1987年～市教委詳細分布調査

海水面の動向と現標高だけでは遺跡の立地を語ることはできない。土地の隆起・沈降等も考慮する必要があるし、前節で述べたような平野の微地形も遺跡の立地に影響を与えている。

近年、発掘調査や分布調査の積み重ねにより、遺跡の分布や広がり、旧地形が徐々に明らかにされつつある。概して遺跡は島状の微高地上を生活適地として立地しているものが多い。しかし、平野の大部分は市街地として開発され、明治の耕地整理時の姿すら残さない所もあり、旧地形を復元的に考えるのは難しい。本来ならば、周辺の遺跡を鑑みると、遺跡の立地や変遷と深く係わるそれら地形・地質と後世の改変についても十分に考慮しなければならないところであるが、本節ではそういった詳細な検討には至っていない。

金沢平野においては、海水面が低下し始める縄文時代中期頃には確実に集落が形成され始めたようである。この頃の遺跡としては、北塚遺跡(34)や古府遺跡があげられ、これらの遺跡は現標高5~7mの地点にある。北塚遺跡では平成7年度の発掘調査で石囲炉(複式炉を含む)を持つ住居跡(縄文時代中期末頃)が5棟分以上検出されており、翡翠製の大珠や指輪状の石製品などの出土遺物と併に往時の金沢平野の様子を窺い知る貴重な資料である。

縄文時代後期以降は気候の冷却化(海水面の低下)がさらに進み平野での遺跡数が増え、さらに低湿地の微高地上でも生活の痕跡が残るようになる。この動きは弥生時代中期頃まで続き、この冷却期に人々はその生活の中心をそれまでの段丘上から平野部にと変えたようである。代表的な遺跡は、縄文時代後・晩期では中屋遺跡(14)、新保本町チカモリ遺跡(27)、近岡遺跡、御経塚遺跡、米泉遺跡など、弥生時代前・中期では矢木ジワリ遺跡(22)、寺中遺跡(48)、戸水B遺跡、戸水C遺跡などがあげられる。

弥生時代後期から終末期にかけて周辺の遺跡数は爆発的に増加する。上荒屋遺跡(17)、北塚遺跡(34)、寺中B遺跡(49)、畝田遺跡(51)、など第2図の範囲だけでも30余りの数になる。しかし、これらの遺跡は古墳時代前期にはほとんど廃絶する。政治・社会的な要因の他に古墳時代前期頃から再び気候が温暖化し、小規模な海水面の上昇が起きるといった自然的要因も考えられるだろう。

現在、金沢平野では若干の例外を除き墳丘を持った古墳を見ることはできない。しかし、近年の発掘調査によって多くの古墳が存在したことがその周囲の検出によって判明している。戸水C古墳群や藤江C古墳群では前方後方墳を含む十基前後の前期古墳が確認されており、北塚古墳群(34)では現存するおまほる塚古墳、宇佐神社古墳と共に中・後期に展開する十数基の古墳が確認されている。これら平野部の古墳の動態は起伏に富んだ旧地形を探る手がかりとなるであろう。



第3図 金沢平野の遺跡分布の変化

## II 経緯と経過

### 1 既往の調査

本書に報告する下安原海岸遺跡は、石川県金沢市の北西部の現海岸線付近に位置し、安原砂丘の厚い堆積砂に埋没している。近年、海岸が浸食されて堆積砂が流出することによって露頭した黒色の遺物包含層から多くの遺物が採集され、その存在が広く知られることになった。しかしそれと同時に遺跡自体も波浪浸食や、流出を防ぐために行われる護岸工事や海岸線の整備工事によって損傷を受けている。このような状況の下で、下安原海岸遺跡では第2表の通り、様々な原因でこれまでに5次に及ぶ発掘調査が行われている他、ごく小規模な調査も何度か行われているようである。

第2表 既応の調査

調査回数	調査期間	調査主体	調査原因等	主要遺構	主要出土遺物
第1次調査 (1970) 117㎡	昭和45年 3月27日 ? 4月5日	石川考古学研究会	波浪による遺跡消失に備えた記録保存(市費補助事業)	井戸、貝塚	弥生土器、古式土器器、打製石斧(4)、砥石(2)、土甕、土製円盤、銅鏃(3)、石鏃(2)、管玉(2)・未製品・剝片
第2次調査 (1971) 1,500㎡	昭和46年 6月19日 ? 7月17日	石川県教育委員会 文化室	金沢海岸災害復旧	河川、溝、土坑	弥生土器、古式土器器、打製石斧(2)、磨製石斧(3)、石包丁(1)、砥石(3)、ガラス玉(1)、土甕、土製円盤、銅鏃(2)、石鏃(2)、管玉(1)・未製品・剝片、針状石製品、火鉢臼・棒
第3次調査 (1972) 750㎡	昭和47年 10月7日 ? 10月24日	石川県教育委員会 文化室	金沢海岸災害復旧	溝、土墳墓状遺構	弥生土器、古式土器器、銅鏃(1)、石鏃(3)、管玉(1)・原石・未製品、木製品
第4次調査 (1973) 1,200㎡	昭和48年 11月1日 ? 11月30日	石川県教育委員会 文化室	金沢海岸災害復旧	時化により調査中断	弥生土器、古式土器器、打製石斧(1)、銅鏃(1)、石鏃(1)、管玉(3)、木製梯子、建築部材
第5次調査 (1987) 500㎡	昭和62年 7月20日 ? 8月28日	石川県立埋蔵文化 財センター	自転車道建設	竪穴住居、河川、溝、土坑、土器溜まり	弥生土器、古式土器器、石鏃(3)、砥石(3)、すり石類(3)、土甕、銅鏃(1)、石鏃(4)、管玉(1)・未製品・剝片、針状石製品、楔形石器
第6次調査 (1995) 680㎡	平成7年 5月8日 ? 7月26日	石川県立埋蔵文化 財センター	金沢海岸災害復旧	溝、土坑、河川	弥生土器、古式土器器、土甕、打製石斧、磨製石斧、すり石類(5)、石鏃(4)、石鏃(2)、軽石、砥石、管玉・未製品、火鉢臼、丸木弓(2)、木鏃(2)、指物箱側板



第1次調査風景



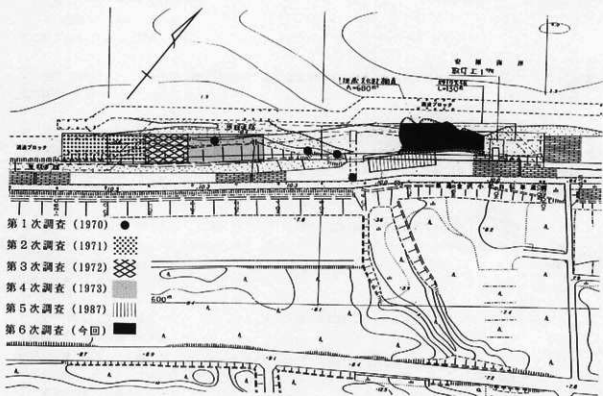
第1次調査 井戸



第1次調査 貝層



第2次調査



第4図 調査区位置 (S=1/2,000)

## 2 発掘調査に至る経緯

平成6年12月5日は、日本海上空に入っていた寒気により大気の状態が非常に不安定となり、西の風が強まり、大荒れの天候であった。5日午前0時25分には瞬間最大風速24m/sが記録され、打ち寄せた高波によって砂浜が抉られ、消波用に設置されていたテトラポットが沈下し、砂丘を縦走する自転車道の路肩が決壊する災害が発生した。このため自転車道は通行が非常に危険な状態となり、全面通行止めとなった。被災区域内は下安原海岸遺跡の分布域が含まれており、遺跡を被覆していた堆積砂が高波によって消失し、遺物包含層が露頭した。

県金沢土木事務所は自転車道についてはこれ以上の決壊を防ぐため、異形ブロックを堤脚部に被覆する応急措置を講じ、仮復旧を行なった。海岸部については災害による海浜の後退、海底の急勾配が大きく、両方を併せた本格的な復旧工事が必要となり、建設省の災害査定を受けて災害復旧事業としての採択を要望する方針が固まった。工法は海岸に厚く盛土し、コンクリートブロックを乗せる、緩傾斜護岸復旧に決定した。既往の分布調査で確認されている遺跡の範囲と照合すると、工事によって遺跡に影響を受ける面積は約680㎡となった。

事業を所管する県土木部河川課は石川県立埋蔵文化財センターに対して①下安原海岸遺跡の内容、②事業に伴う発掘調査の必要性、③必要な場合の期間、経費について問い合わせを行った。埋蔵文化財センターでは、文化庁記念物課の指導を得て①下安原海岸遺跡についてはこれまでに行われた5回の発掘調査の成果から、弥生時代の集落跡であり、当時は海岸線がもっと沖にあって居住が可能な環境にあったと推定されること、②災害復旧であっても緊急を要する応急工事以外は基本的に埋蔵文化財調査は必要であり、掘削を伴わない工法であっても永久的な構造物で完全に被覆され、以後に発掘調査が不可能な場合は埋蔵文化財調査が必要であることを回答し、さらに、③現地調査、出土遺物の整理、報告書作成までに要する期間と概算費用、について回答した。調査費用については公共事業に伴う緊急発掘調査であることから、原原因負担を原則とすることも付け加えた。

この回答を受けた河川課は建設省に対し事前の埋蔵文化財緊急発掘調査を組み込んだ災害復旧事業の採択を要望した。建設省による災害査定の結果は、公共土木施設災害復旧事業6災106号金沢海岸災害復旧工事として採択され、調査費用については早急に進行させることを条件として、事業の実施に必要な測量試験費として認められることになった。発掘調査は翌平成7年度から実施が予定されたが、波打ち際という悪条件下で作業を迅速かつ円滑に進めるためには、仮設道路の整備、鋼矢板締め切り、排水設備等の、着手前の環境整備が不可欠である。よって調査範囲の確定、費用の確保、調査環境について施工者である金沢土木事務所が整備する旨の覚書が、施工を担当する金沢土木事務所と埋蔵文化財センターとの間で、平成7年3月17日に締結された。この時点から平成7年4月当初にむけて工事及び調査の準備が始まっており、通算で第6次となる下安原海岸遺跡の発掘調査の実施が正式に決定したといえる。



調査前



堆積砂の除去

### 3 現地調査の方法と経過

#### 現地調査の方法

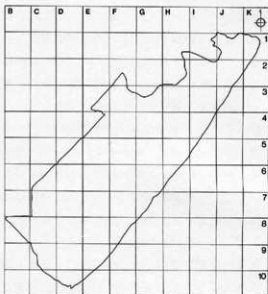
現地調査の方法はグリッド法による全面発掘調査である。グリッドは主軸を座標の方位に沿わせて、東西軸を算用数字(1~10)、南北軸をアルファベット大文字(A~K)の4m方眼とし、個々のグリッド名は北西の座標をあてている。国土地標との対応関係は、G4杭がX=+64,020、Y=-53,340である。下安原海岸遺跡では遺物包含層がきわめて良好な状態で遺存していたため、辺4mの小区画グリッドの全てに畦を残して層序を観察しながら掘り進め、最終的に畦を取り去って完掘する方針で現地調査に臨んだ。

#### 現地調査の経過

発掘調査については、平成7年4月6日付けで県金沢土木事務所から依頼があり、埋蔵文化財センターは同年4月から7月にかけての現地調査を計画し、回答した。調査面積は約680㎡である。

現地調査は中島俊一(埋文センター調査第一課課長)、小嶋芳孝(同課調査専門員)、新屋康夫(同総務課課長)の統轄の下で、端 猛、安 英樹(同主事)が担当し、芝田悟(同技師)が補佐した。

調査着手前には県土木部河川課及び金沢土木事務所担当者、施工業者と打ち合せを行ない、工事、調査の行程を相互に確認した。現地調査に際しては、仮設道路の整備、工事範囲内の鋼矢板締め切り、24時間排水が可能な電気設備と大型ポンプの稼働、遺物包含層を被覆する堆積砂の除去について、施工者の協力を得て、5月8日から着手した。図化に用いる基準点の測量及びグリッドの設定は業者委託で5月18日に行った。遺物包含層の掘り下げ及び遺構検出・掘り下げは北から始め、順次土層観察用の畦を除去しながら南へ向かって進め、7月26日に作業を完了し、調査区を施工者に引き渡し、現地調査を終了した。図化作業については、ラジオコントロールヘリコプター撮影による空中写真測量図化を業者委託で7月18日に実施した。調査の成果については主に石川考古学研究会々員を対象として現地説明会を7月23日に実施している。



第5図 グリッド配置 (S=1/500)



調査風景 1



調査風景 2

## 4 屋内整理

現地調査の終了後、平成7年度は空中写真測量図の校正作業、出土遺物の整理作業、出土遺物の自然科学的分析を行った。出土遺物の整理作業は主に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行い、洗浄作業を平成7年9月25日から同年10月25日まで、記名、分類、接合、実測、遺物・遺構実測図のトレース作業を平成7年11月8日から平成8年3月29日まで行なった。但し、木器・木製品の洗浄と仮処理、土壌の水洗選別については石川県立埋蔵文化財センターの直営で作業を行っている。

翌平成8年度は4月15日付けで県金沢土木事務所から依頼を受けて、出土遺物の自然科学的分析、出土遺物の写真撮影、原稿執筆、挿図・図版作成を行い、発掘調査報告書を編集、印刷し、刊行した。



太型蛤刃石斧（第25図1）出土状況



現地説明会



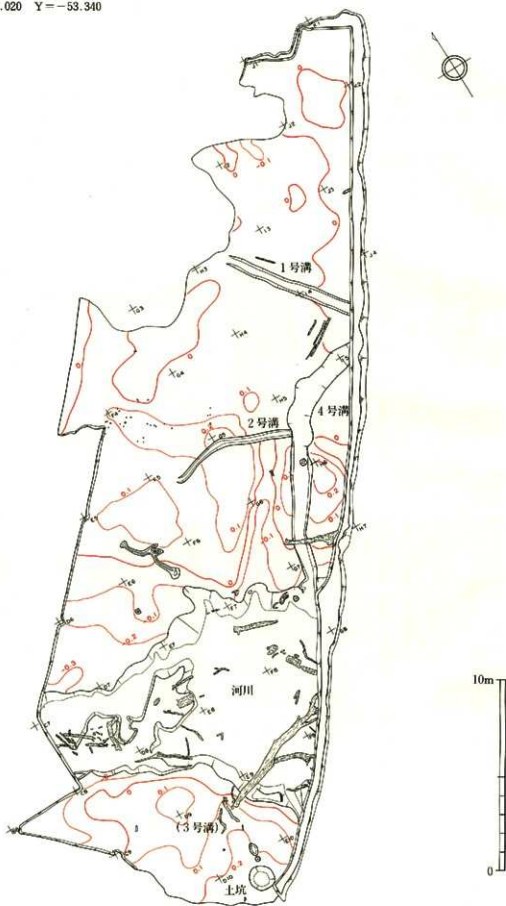
出土遺物整理1



出土遺物整理2

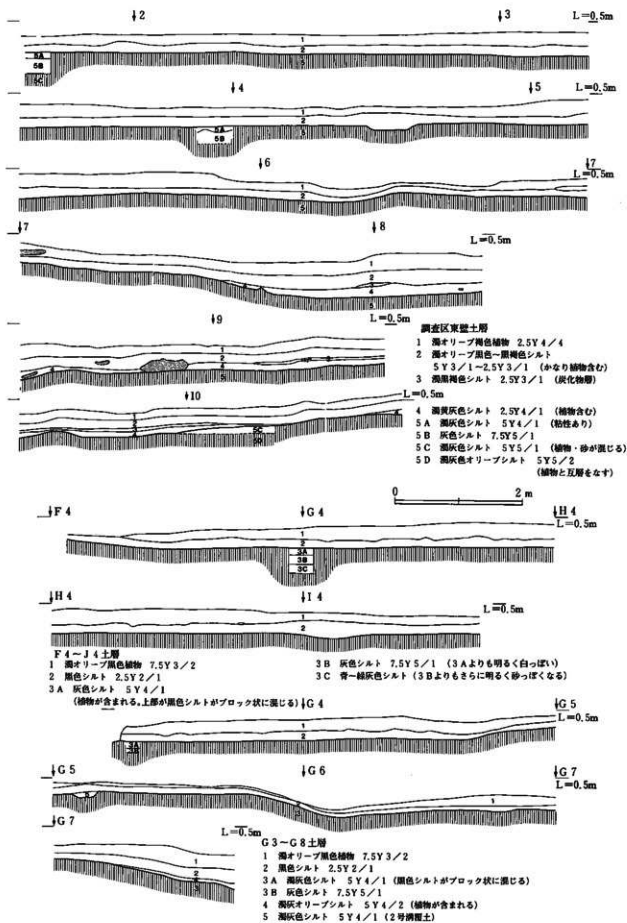


G 4 : X = +64.020 Y = -53.340



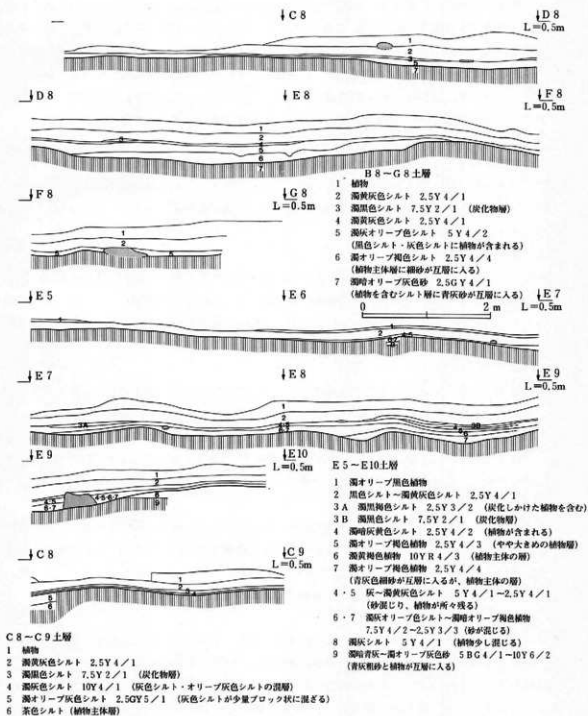
第6图 調査区全体 (S=1/200)





第8図 調査区土層 (1) (S=1/60)

で区別できた。遺構の密度については比較が難しいが、左岸のみ土坑が存在する。また、左岸の遺構である3号溝は上下の遺物包含層間を検出面としており、土坑は基盤層を検出面とすることから、上下位最低2面の遺構面(生活面)が存在することにならう。遺物量は左岸が右岸よりも面積が小さいにもかかわらず圧倒的に多くなっている。これらの様相差については、次章以降で遺構・遺物の内容をより具体的に示し、末章で調査区が遺跡内でどのような性格を持つ地点であったのかを明らかにすることによって、説明にかえたい。



第9図 調査区土層(2) (S=1/60)

## IV 遺 構

### 1 各説

#### 土坑（第11図、図版4）

調査区の南端、D10区に位置する。不整ながら角の取れた平面形、急な掘り込み、平坦な底面を持つ土坑である。長径は南北方向で約135cm、短径は東西方向で約126cm、深さは約30cmを測る。覆土は5層（第11図層3～7）で、層3・層6間で上部・下部に分層できる。層3は下位遺物包含層と同質、層6は植物が顕著に含まれる層である。層4・5・7は遺構の縁にのみ見られ、基盤土を含んでいることから崩壊土層と思われる。遺物は土器、植物遺体が多く出土した他、石斧、管玉、動物遺体（骨片）が出土しており、土器は覆土上部、植物遺体はオニグルミ核が主で覆土下部に特に顕著に含まれていた。

#### 1号溝（第10図、図版5）

調査区の北部、H3～I4区にかけて位置する。北西・南東方向に直線的に走る溝で、南東側は調査区外に伸び、北西側は狭く浅くなり途切れる。幅45～65cm、深さ2～6cmを測る。底面の標高は北西側が高くなっている。覆土は遺物包含層と同質の黒色シルト（第10図層2）であり、識別は難しい。遺物は出土しなかった。

#### 2号溝（第10図、図版5）

調査区の中央部、F5～G5区にかけて位置する。東西方向に走る溝で、G5杭付近で弧状に曲がり北へ膨らみ、東端は4号溝に切られ、西端は逆に南に膨らみがちになって途切れる。幅26～44cm、深さ4～7cmを測る。底面の標高はG5杭付近が最も高く、東西両端はやや低くなっている。覆土は濁灰色シルトの単層（第10図層3）である。遺物は出土しなかった。

#### 3号溝（第11図、図版6）

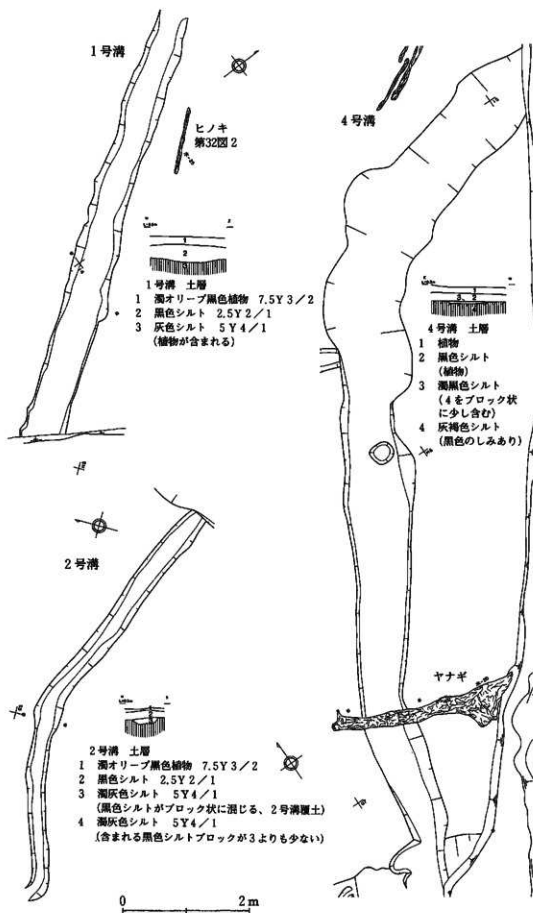
調査区の南端、C9～D10区にかけて位置する。上下位遺物包含層間で検出され、下部包含層を切り込んでいる。北西・南東方向に直線的に走る溝で、両端は途切れているが、南東側では土坑を切っている。幅は28～55cm、深さは2～10cmを測り、一定でないが、概ね北西側が広く深く、底面の標高は北西側が低い。覆土は濁オリブ黒色シルトの単層（第11図層7）である。遺物は土器が遺構内とその周辺に細かく砕けて散乱したような状態で出土した他、石斧、石鏃、軽石、動物遺体（骨片）が出土している。

#### 4号溝（第10図、図版5）

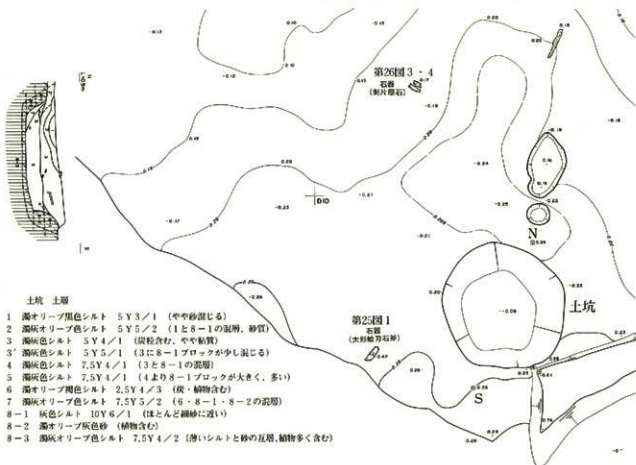
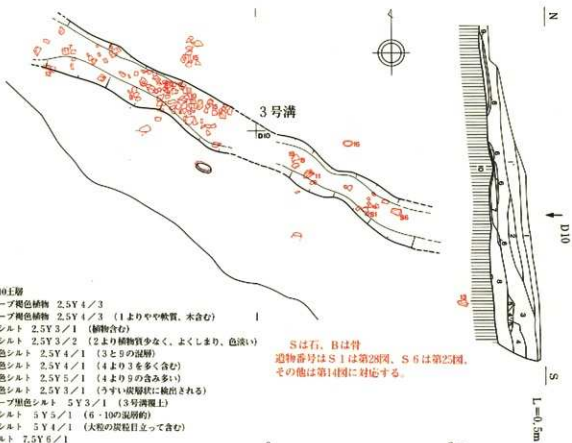
調査区の中央部の東壁寄り、主にH5～G6区にかけて位置する。南北方向に走る溝で、北側では東へ向かう弧を描いて調査区外へ伸び、南側は河川の肩部に重複する。河川との切り合いは認めがたく、連結するものと考えたい。幅50～110cm、深さ3～7cmを測り、底面は南側が低くなっている。覆土は濁黒色シルトの単層（第10図層3）である。遺物は土器が少量出土している。

#### 河川（第12図、図版3）

調査区の南部、主にC7～E9区にかけて位置する。北西・南東方向に走る大規模な溝で、両端は調査区外へ伸びている。幅2.8～8.6m、深さ50cm前後を測る。肩部の傾斜はどこでも比較的緩やかであるが、北西側が極端に幅が狭まり、底面は凹凸があるが概ね北西側が低い。覆土は概ね上位シルト質、下位砂質となる層層を呈し（第8図・第9図）、中央ほど細薄な砂・シルトの互層を狭にし、下位は植物遺体を多く含む傾向がある。下位の砂層の堆積からは水流があったものと推定され、全体的に不整な



第10図 1・2・4号溝 (S=1/60)



第11回 3号溝・土坑 (S=1/40)

形状から、北西に流れる自然河川と判断される。但し、上位のシルト層が堆積する段階では水流はかなり衰え、さらに上位に植物遺体層及び遺物包含層が浅いレンズ状の落ち込みを見せて遺構を被覆する段階には浅い窪地状を呈していたものと推定できよう。遺物は土器、植物遺体の他、木器・木製品、石器・石製品が出土している。土器は弥生中期のもの、植物遺体は覆土下部から底にかけて散乱していた自然木が大半である。底面の認定は、遺物が出土しなくなることを根拠にしたが、土質は下部覆土とそう変わるものではない。本遺構の底面については、Ⅲ 1 でふれた以外の論拠を持たないが、遺跡の基盤層下に存在する地形安定前の砂層に達しているものと解釈している。

## 2 小結

Ⅲ 2でも述べたように、検出された遺構は4条の溝、土坑、河川である。このうち溝についてはいずれも浅いものであるが、流向が東西、南北、北西・南東方向の3種があり、覆土はシルト質の灰色系と黒色系に大別される。1・3号溝は流向がほぼ共通し、4号溝とは覆土が共通し、3号溝は土坑より新しい。2号溝は土坑、河川上位とはほぼ覆土が共通であり、流向は新しい4号溝と直交して、4号溝は河川に連結する。そして2種の覆土はⅢ 3で述べた上下の遺物包含層に対応するものとなることから、遺構の時期差と覆土の対応が認められる。遺構の時期を考える指針の一つとして提示しておきたい。



第12図 河川 (S=1/100)



# V 遺 物

## 1 土器・土製品

### 土器概説

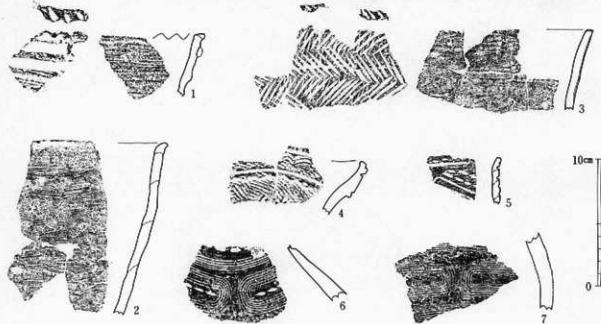
出土した土器は、時期的には弥生中期と後期が中心である。当地域の弥生時代中期の土器は甕、壺、鉢を基本器種とし、後出的に高杯が少量加わる。系統別では条痕文系、櫛描文系、凹線文系で主に構成され、概ねこの順序で推移するが、それぞれの過渡期には共存する。この他に前半期まで沈線文系、後半期から信州・東北系、そして近江系が加わる。ただし、沈線文系土器は器種的に広口壺、鉢に偏っており、分布域をはば同じくする条痕文系土器を補うような存在と考える。また、信州・東北系土器は遺跡単位での出土がごく微量にとどまり、近江系の土器も器種が甕にはば限られている。以上の3系統の土器は北陸においては基本的に独自で様式を形成し得ない系統といえる。

弥生時代後期の土器は甕、壺、鉢に高杯、器台が定量的に加わり、壺・鉢も精製と粗製に明瞭に区別され、器種は多様化する。系統的には中期末に成立した凹線文系土器を母胎として山陰、丹後、近江地方の様式を小地域差をもって取り入れつつ推移し、その末期には本遺跡も含む北陸南西部において、軽薄甕を有する地域性が強い独特の土器様式を成立させている。

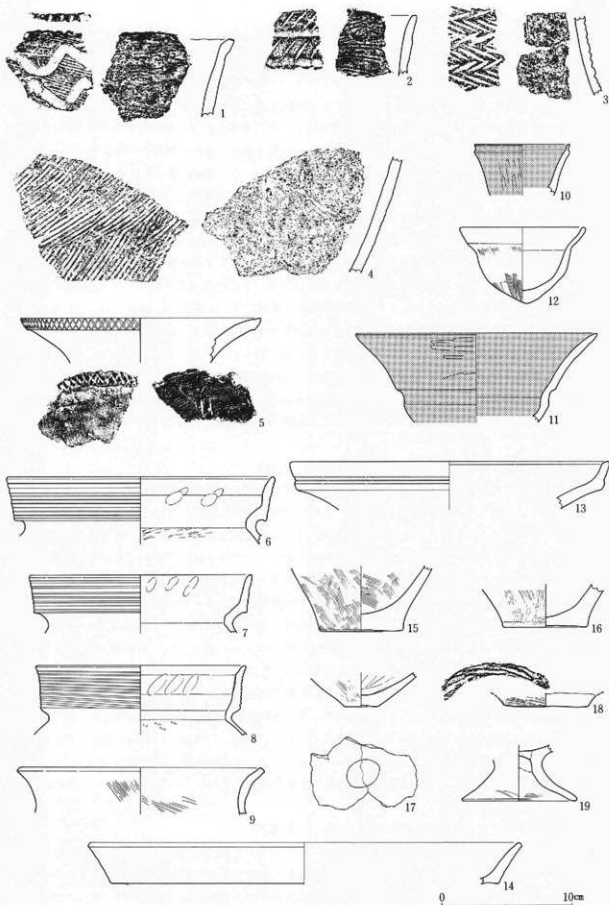
弥生前期、中期末期から後期前半期、古墳前期の土器は存在するがごく微量と思われるので、ここでは弥生時代の中期（以前）と後期（以降）という形で大別して説明することにした。

遺構出土（第13図～第15図、図版7・図版8）

第13図は土坑出土で、全て弥生中期の土器。1～3は条痕文系の甕である。1は指線線の1条に引き継ぎの盛り上がりが見られる。2は櫛描文系の調整と条痕文系の器形・胎土を持つ折衷土器と考える。3は接点が複合する横連の綾杉文を持つ。4は条痕文系、5は沈線文系、6・7は櫛描文系の壺であろう。6・7は同一個体と思われ、流麗な櫛描流水文を持つが、隙間に刺突文が配される等、甕内の櫛描



第13図 土坑出土土器 (S=1/3)



第14图 3号溝出土土器 (S=1/3)

文系土器に比べると異質であり、むしろ沈線文系土器の影響が感じられる。

第14図は3号溝出土で、弥生中期の土器(1~5)と弥生後期の土器(6~14)が混在する。1~4は条痕文系の甕。1~3は意匠がかなり異なっており、1の条痕地に山形の指沈線・端刈みに対して、2は外面の条痕をなで消して指沈線・斜行文、3は条痕を消し去って絞杉文としている。5は櫛描文系の壺。6~9は甕で6~8は有段口縁に縦凹線を施すもの、9はくの字口縁をもつもの。10は小径の壺。11・12は鉢。11は精製鉢で高杯にもよく見られる形態である。12は小型尖底の粗製鉢である。ほぼ完形品で、口径10cm、器高6.1cmを測る。13・14は器台としたが、遺存が悪く断定は控える。特に13は調整が粗いので、大型の壺かもしれない。15~19は底部。15・16は肉厚で、15は底面にヘラ引き痕が残る。18は胴部がタタキ調整であることがわかる。19は精製の台脚である。15・16は中期の可能性があるが、17~19はいずれも後期で、17は壺、18は壺、19は精製の台脚壺か鉢であろう。

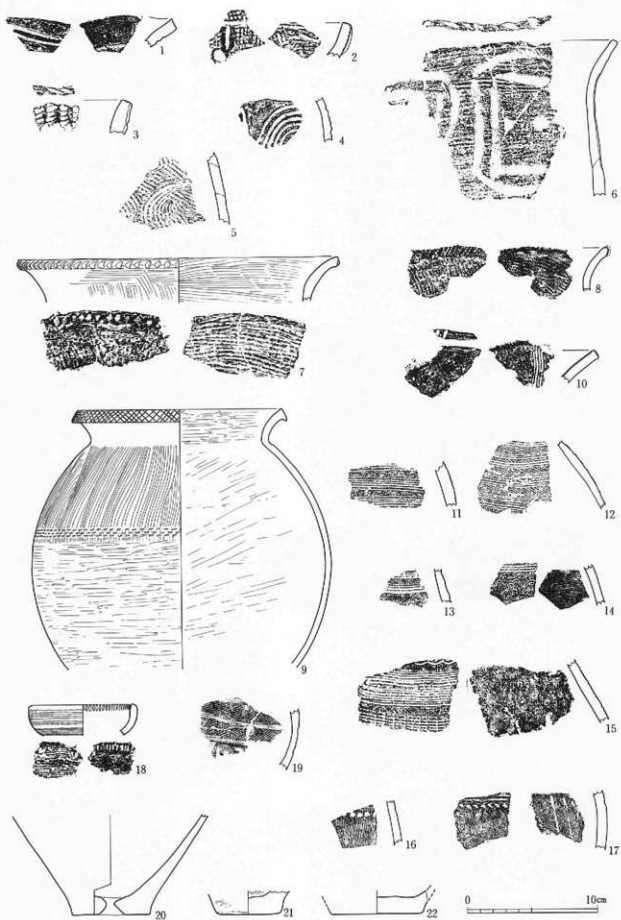
第15図は河川出土で、全て弥生中期の土器。1~5は壺で、1~4は沈線文系、5は条痕文系と思われる。1~3が口縁部で、4・5は胴部。4の文様は渦文、5は円弧文であろう。6は条痕文系の甕で、指沈線で図形文様が描かれる。7~18は櫛描文系土器で、7~9は括れ・胴張りの小さい器形で厚く煤が付着していることから甕と推定した。9は外面下半と内面を磨き、胴部中に刺突を巡らす。10~18は各種の櫛描文様を持つことから壺と考えたいが、14~17には煤が付着しており、装飾が施される土器も煮沸に使用されると見なすべきであろう。18は長頸壺の口縁部の可能性がある。19は信州系土器もしくは縄文土器と思われる。20~22は底部である。正確な器種は不明であるが、22や底部穿孔の20は煮沸使用されている。22については胴部との剝離面に炭化物が付着しており、胎土中にしみ込んでいる。

#### 下位遺物包含層・炭化物層出土(第16図・第17図、図版9)

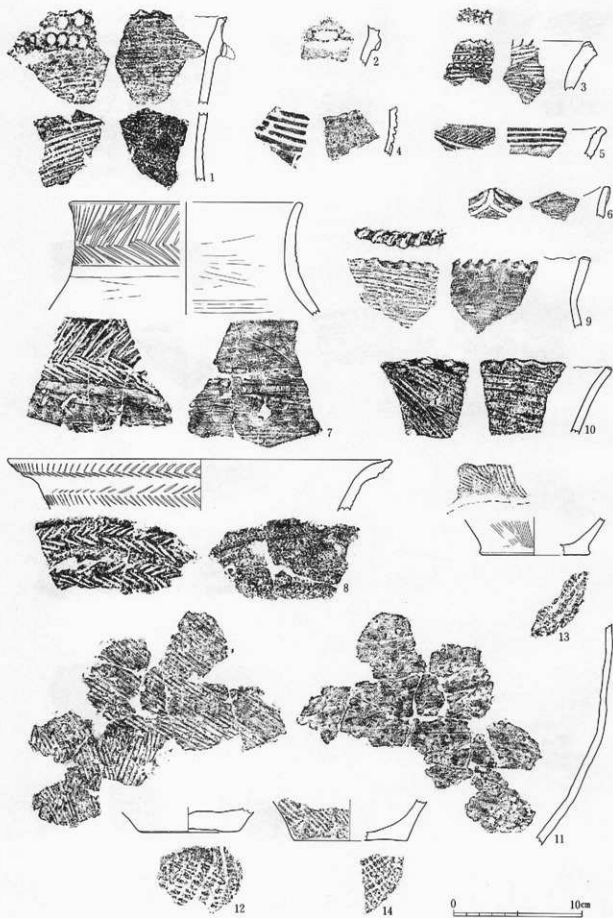
ほぼ河川の左岸でのみ見られる堆積層を一括した。弥生中期の土器(第16図・第17図1~4)と弥生後期の土器(第17図5~16)が混在し、後期の土器については上位遺物包含層と接合するものが多い。第16図1~8は壺で、1~3・7・8は条痕文系、4~6は沈線文系と思われる。概して、条痕文系の壺は大型であり、沈線文系の壺は煤が付着する頻度が高い。1は同一個体が多かったので、器形を復元した。5は粒の細かい縄文を区画内に充填したと思われる。7・8は器形に類例が乏しく、甕にも見られる文様や、煤が付着する7など、厳密に区別することが難しい。9~11は甕で、条痕文系である。12~14は条痕文系の底部で、底面に漏物圧痕が見られる。第17図1は浅くて太い条痕とも言えるべきやや異質な調整が内外面に見られ、2は円形の刺突文や竹管による山形文といった櫛描文以外の文様が組み合わさっており、ともに条痕文系の壺として扱った。3は櫛描文系の壺である。4は櫛描文系の鉢と思われる。2段の絞杉文の上段は沈線が入るが、下段では見られない。端にも斜行文の痕跡が見られるが、磨滅しており確実ではない。5~11は壺で、5~9は有段口縁に縦凹線を持つもの、10は有段口縁に無文のもの、11はくの字口縁をもつものである。12・13は壺。12は甕との区別が難しいが、胎土に砂礫があまり含まれないので壺と考えた。強いヨコナデによって有段口縁に似た形状をとる。14は脚で、おそらく高杯であろう。15・16は底部。15は5と同一個体と思われるので甕、16はナデ調整が見られることから壺と思われる。

#### 上位遺物包含層出土(第18図~第24図11、図版10~図版15)

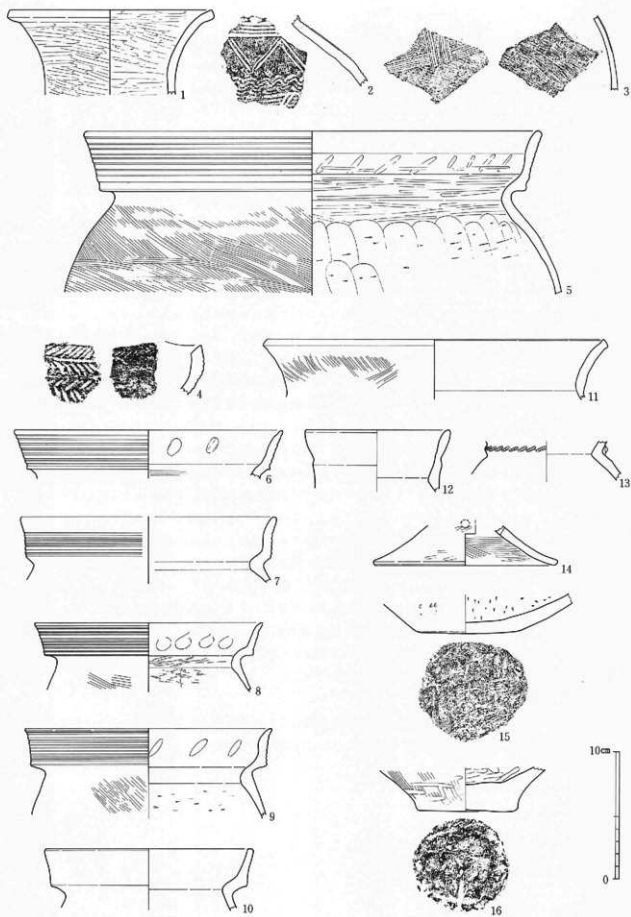
調査区に一連に堆積する遺物包含層を一括した。弥生中期の土器(第18図・第19図)と弥生後期の土器(第20図~第24図7)が混在する。第18図は条痕文系、沈線文系と思われる土器。1~4は条痕文系の甕で、いずれも多条の指沈線を持つ。5~13は条痕文系の壺と思われる。8・9は三河系の受口状口縁壺と通称されるもので、きわめて加飾性に富む。10~13は胎土から判断したものであるが、11~13は



第15圖 河川出土土器 (S=1/3)



第16圖 下位遺物包含層・炭化物層出土土器(1) (S=1/3)



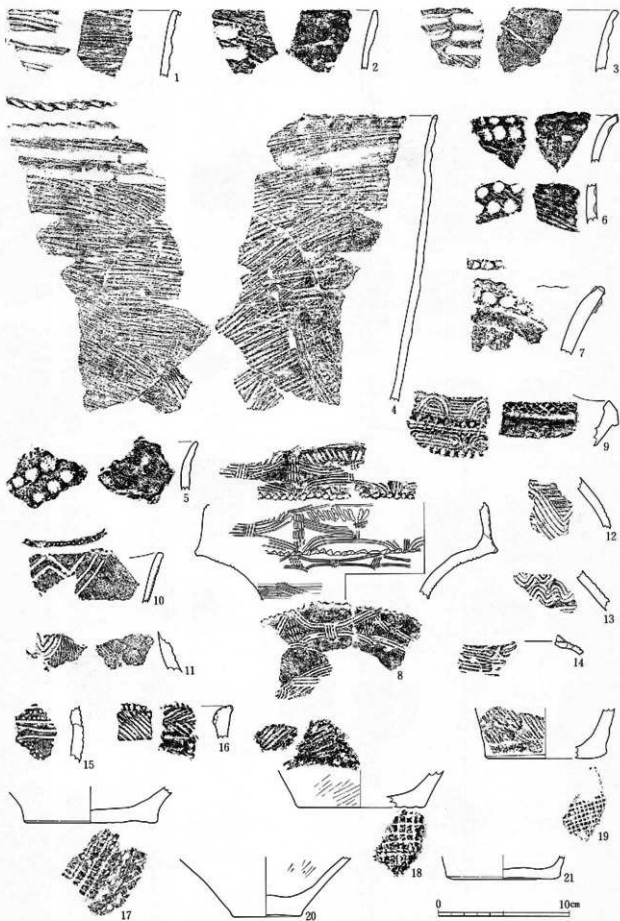
第17图 下位遺物包含層・炭化物層出土土器(2) (S=1/3)

文様やハケに似た調整等で、櫛描文系土器の要素が多分に見られる。14・15は沈線文系の壺で、14については無頸壺と思われる。17～21は底部で、底面の編物圧痕が見られない。20・21は胎土から判断した。第19図1～19は櫛描文系の土器。器形、胎土、固有の装飾、煤の有無から、1～10・14・15は壺、11～13・16～18は壺と判断したが、小破片については断言できない。1・2の端部ヨコナデ、4のL字状口縁、8の鋭い頸部の屈曲といった特徴はいずれも当遺跡では僅少例である。ただし、1・2は後期以降に降る可能性もある。20・21は信州系の土器で、20は鉢、21は壺か鉢と思われる。20・21の胎土や質感は、当地域では異質な存在であることから、搬入品の可能性がある。22～29は櫛描文系の底部と思われる。底面は平坦なものが多いが、26については明確に窪み底と認められる。

第20図～第22図9は壺である。口縁形態から、第20図～第21図9が無凹線を施す有段口縁(A)、第21図10～22が無文の有段口縁(B)、第22図1～3が近江系の受口状口縁(C)、第22図4～9がくの字口縁(D)に大別される。量比ではAが圧倒的に多く、Bがこれに次ぎ、C・Dは僅少である。Aの中では第20図1～8のように口縁部が直線的、短い、頸部内面が屈曲する等の特徴を持つものは少なく、口縁部が外反、端が細く尖る、頸部内面が筒状でヨコハケが入る等の特徴を持つものが主体を占める。第21図8・9は他の倍以上の大容量壺と推定される。Bは形態的にはほぼAに準じた内容であるが、口縁部は全般に短めである。第21図21・22はBとしたが、磨滅・剝離によりAと判別が難しい。また、Bとした第21図11や、Dとした第22図4・5等、B・D間で判別が難しいものがある。第22図10～22は壺である。10～16は壺に似た器形をとり、10以外は基本的な調整や胎土も壺と共通する。これらは19も含めて煤が付くものが多く、機能的には壺と大差ないかもしれない。17・18・20は精選された胎土を持ち、17・18はかなり大容量の壺と推定される。21・22は肩部に櫛描文を持つが、薄手のつくりと器形から、後期以降の壺と考えた。23・24は蓋である。24はほぼ完形で、口径5.5cm、横み径1.9cm、器高3cmを測る。第23図1～8は鉢である。1～4・7はミガキ調整の精製鉢で、それと比べると5・6は粗製である。2・3は高杯杯部にも見られる形態であり、7のように脚台が付く可能性もある。8は多角形の底部と思われ、底と胴に異なる編物圧痕を持つ。胎土から後期としたが、類例はほとんどない。9～18は高杯で、9～12は杯部、13～17は脚部、18は杯・脚の充填部分である。19～23は器台で、19・20は器受付部、21～23は脚部である。高杯・器台について、煤・炭化物が付くものは破損後に蓋に転用されたものと思われる。24は容器の胴部を円形に打ち欠いて穿孔しており、紡錘車と思われる。25はその未製品であろう。26は球状の土罐であり、直径3.3cm、孔径0.6cm、重さ29.3gを測る。第24図1～11は底部である。底径は大小あるが、底面は窪み底の5を除いて概ね平坦である。器種は3・9の壺以外は、壺か粗製の壺・鉢であろうという程度にしか判別できない。

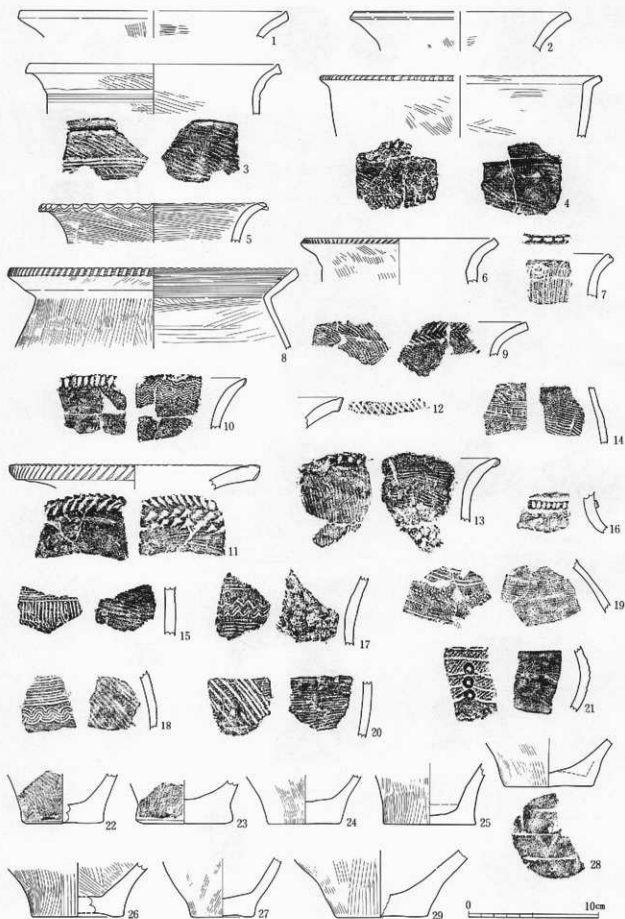
その他(第24図12～16、図版15)

調査区とその周辺から採集されたもの、調査区を覆っていた砂丘砂から出土したものを一括した。全て弥生後期の土器であり、第24図12・13は壺、14～16は器台である。

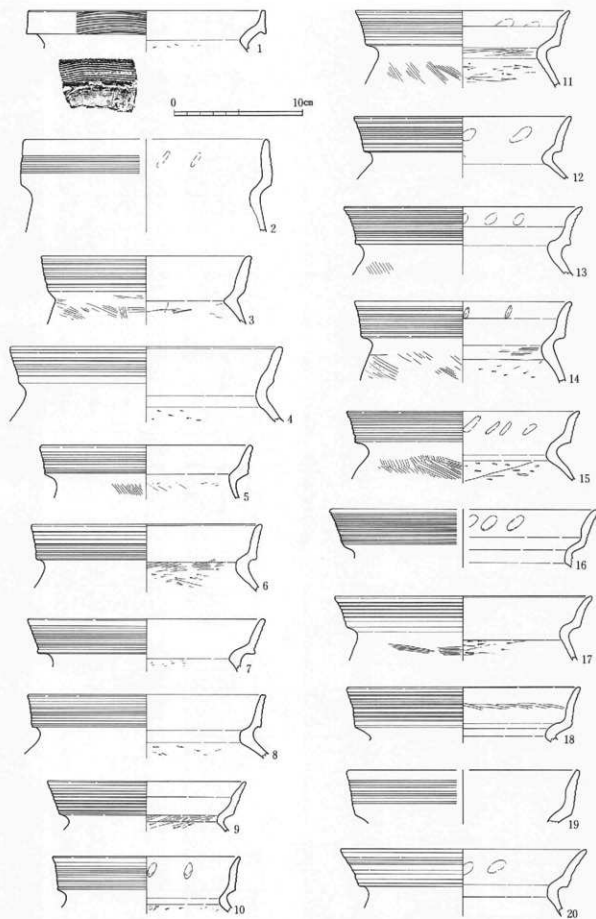


第18图 上位遺物包含層出土土器 (1) (S=1/3)

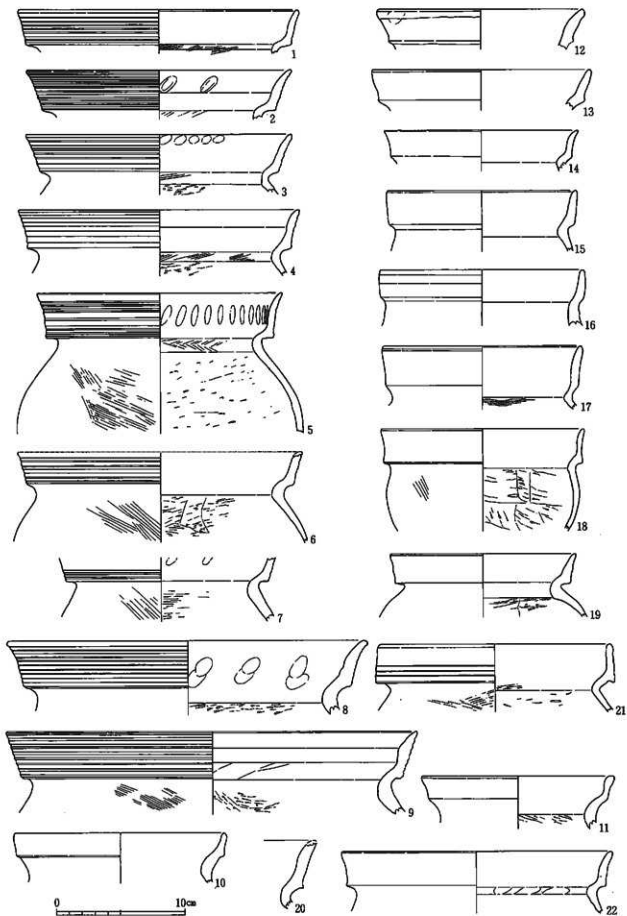




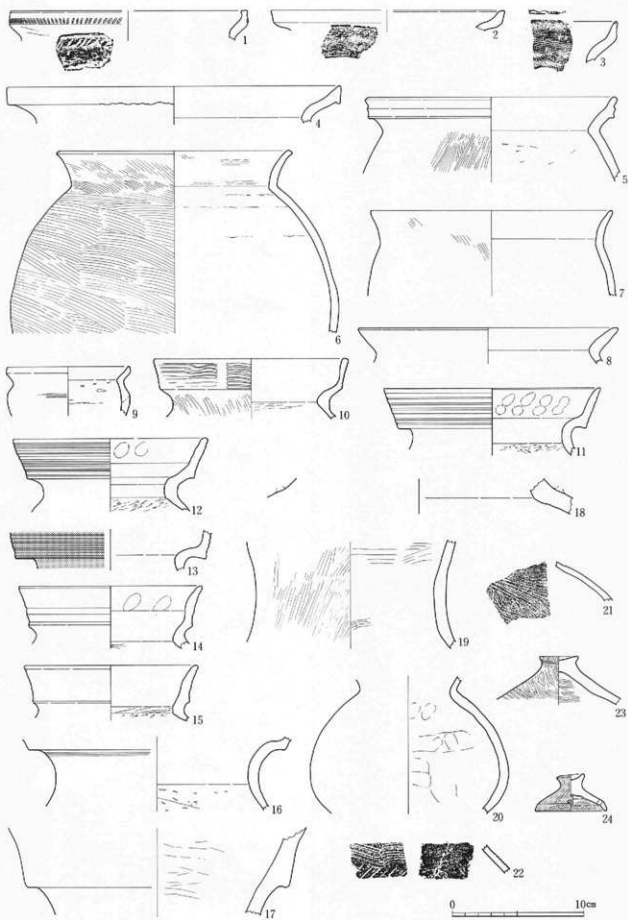
第19图 上位遺物包含層出土土器(2) (S=1/3)



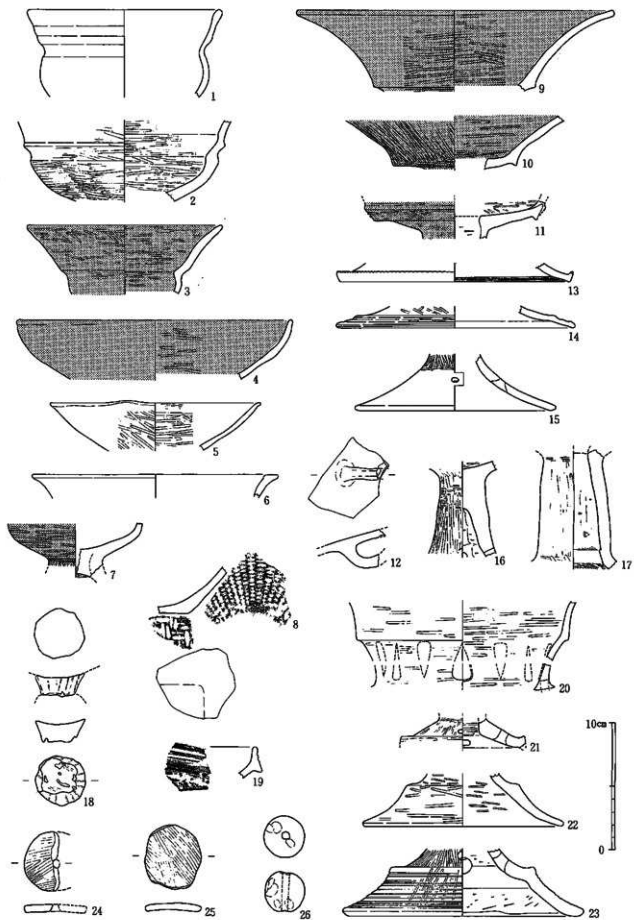
第20圖 上位遺物包含層出土土器(3) (S=1/3)



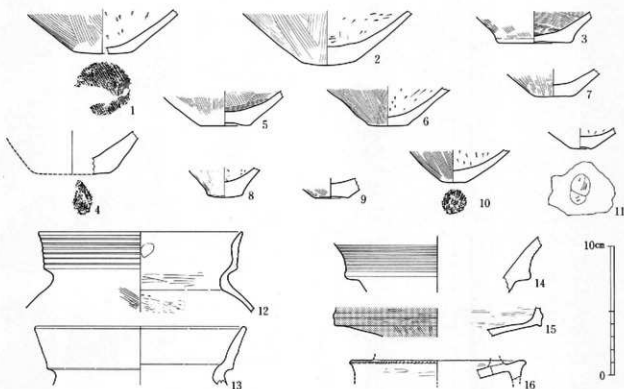
第21圖 上位遺物包含層出土土器(4) (S-1/3)



第22图 上位遺物包含層出土土器 (5) (S=1/3)



第23图 上位遺物包含層出土土器(6) (S=1/3)



第24図 上位遺物包含層・その他出土土器 (S=1/3)

## 2 石器・石製品

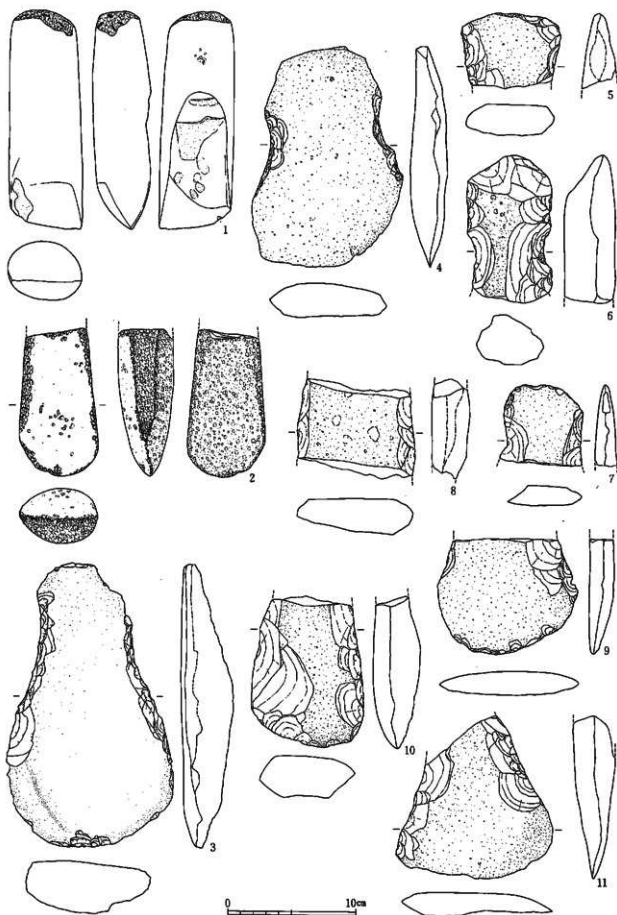
### 石斧 (第25図、図版16)

第25図1・2は磨製石斧で、弥生時代に通有の大陸系磨製石器の一つ、大型蛤刃石斧である。1はほぼ完存し、硬質な石材に研磨光沢を持ち、重量感に富む優品である。断面楕円形の厚斧で、偏刃である。主面の一方で、斧主軸に直交する深い線状痕とそれを境として刃部側へ剝離されたい平坦面が見られる。柄装着のための造作であろうか。2は基部を欠くが、1に比べやや小型らしく、また主面・側面を分かつ破をもっており、より扁平に感じられる。やや風化が進んでいる。

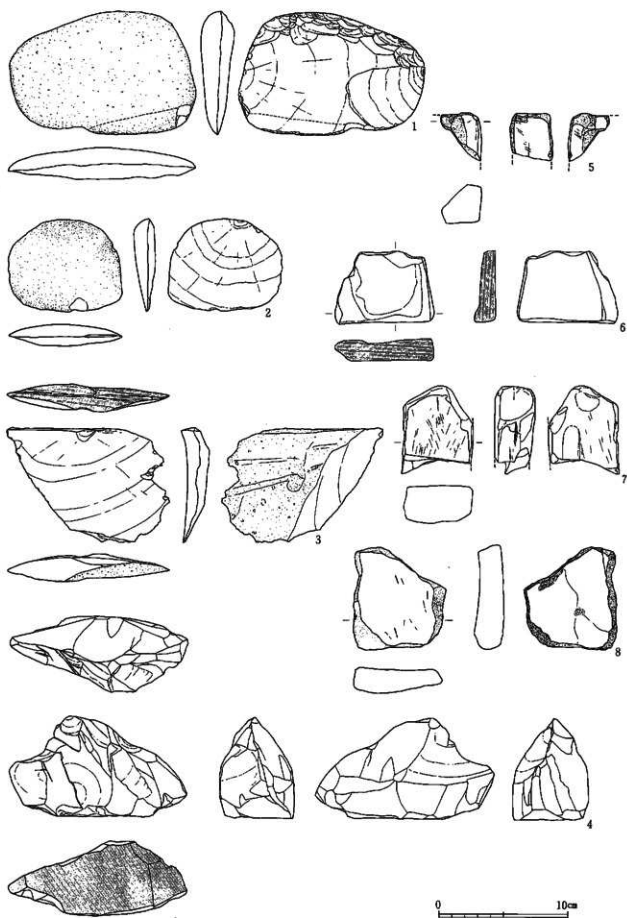
3～11は打製石斧である。河川礫を素材とし、主面の一面が剝離面、もう一面が自然面で、刃部よりむしろ側縁を主に剝離調整する技法的な特徴は一致している。平面形は概ねバチ形を呈するものと思われる。3・4はほぼ完存するがその他は欠損が著しい。欠損したものの基部と刃部の判別は難しいが、幅狭のものや厚みがあるものを基部とした。5～8は基部、9～11は刃部である。8は基部端も欠損しているが両側縁の剝離痕から打製石斧と判断した。

### 剥片・石核 (第26図1～4・第29図、図版17・図版18)

第26図1・2は河川礫を素材とする剥片で、剝離面と自然面が表裏をなし、縁は薄く尖る。1は長辺方向の薄い方の縁に細かい剝離調整が見られ、刃部と認識できる。さらに剝離面・自然面の両方で刃縁に沿った光沢が観察でき、植物を切断した使用痕と思われる。2は1の小型版ともいふべき形状であるが、1のような使用痕は観察できない。3・4はD9区で基盤層に重なって突き立った状態で出土した同石材の剥片と石核のセットである(第11図)。石鎌等の小型打製石器に使用される石材であるが、3の剥片、4の石核とも石器素材を剝離させた痕跡はほとんど見られない。石器製作に備えて石材を確保



第25圖 石器・石製品(石斧) (S=1/3)



第26圖 石器・石製品（剥片・石核・砥石）（S=1/3）



しておいたのだろうか。第29図は小型の石核・剥片である。原石の加工状況から、1～15は剥片、16・17は石核とした。3は図の上端に明瞭な剝離痕、下端には不規則な剝離痕が見られることから楔と考えられるが、あまりにも小型であり、下端の剝離痕が鮮明でないことから、使用によって折損している可能性がある。なお、1・4は緑色がかった石材であり、玉剥片の可能性もある。

砥石・軽石（第26図5～8・第28図、図版16・図版17）

砥石には角柱状と板状の形態が見られるが、欠損が多い上、使用によってすり減っていく性質であるため、明確な区分ではない。第26図2は使用面が磨んでいるようで、縁が盛り上がって見える。3は主面の一面に複数方向の線状痕が観察できる。4は使用面に緩やかな反りが見られる。

軽石は総じて不定形であるが、摩擦面の数によって1面のもの（第28図1～5）、2面で隣接するもの（6～10）、2面で表裏となるもの（11～13）、3面のもの（14）、4面以上ではほぼ全面に及ぶもの（15・16）に分類できた。

すり石類（第27図、図版17）

摩擦痕、敲打痕を持つ河川礫を一括する。第27図1は主面の一方が摩擦面となり、側面に敲打痕が顕著に見られる。敲打痕は図の上下端が左右端よりも明瞭で、大きい。2は主面・側面とも敲打痕が見られ、図の上半は敲打によって表面が剝離したと思われる。3は側面に敲打痕が見られ、特徴は1と共通する。4は表面がやや風化している。4・5の使用痕は肉眼ではよく観察できなかった。

小型打製石器（第30図1～11、図版18）

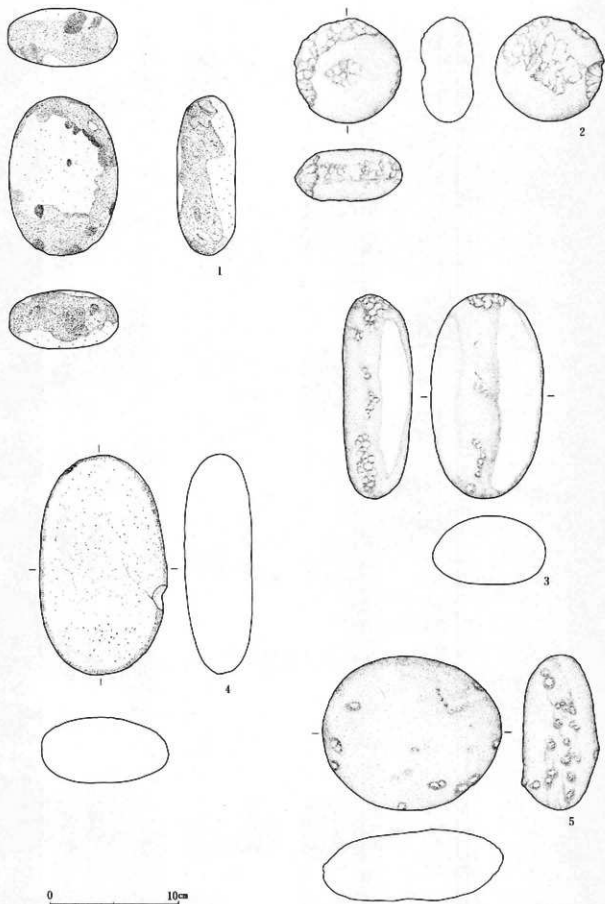
第30図1～8は打製石核である。基部形態では1は凹基、2は平基、7・8は有基に区分される。3～6は基部の凹凸が明瞭でないため平基とするが、5については端が欠けてまだ細く伸びそうであり、凸基となる可能性もある。体部の形状では1・2・6・7が三角形、3～5は柳葉形、8は五角形を呈する。長幅比は2～5・8が2倍を超えるが、1・6・7は下回り、前者は細長く見える。2は直線的な側縁が丁寧に調整されている。6は全体的に調整が雑で、未製品かもしれない。7は透明度は低いながらもガラス質の石材を唯一使用している。サイズのには2と8が突出しており、ともに全長3cm・重量2gを超えるものとなっている。9・10は石錐。9は三角形のつまみ部を有する。10はここでは錐としたが、現状では用途を特定できない形態である。類例は羽咋市吉崎・次場遺跡、金沢市藤江B遺跡にある。11は石匙。弧状を呈して内弧・外弧ともに刃部が作り出されている。類例は羽咋市柴垣・須田遺跡の他、縄文時代ならば加賀市藤ノ木遺跡、金沢市笠舞遺跡等にある。

玉（第30図12～23、図版18）

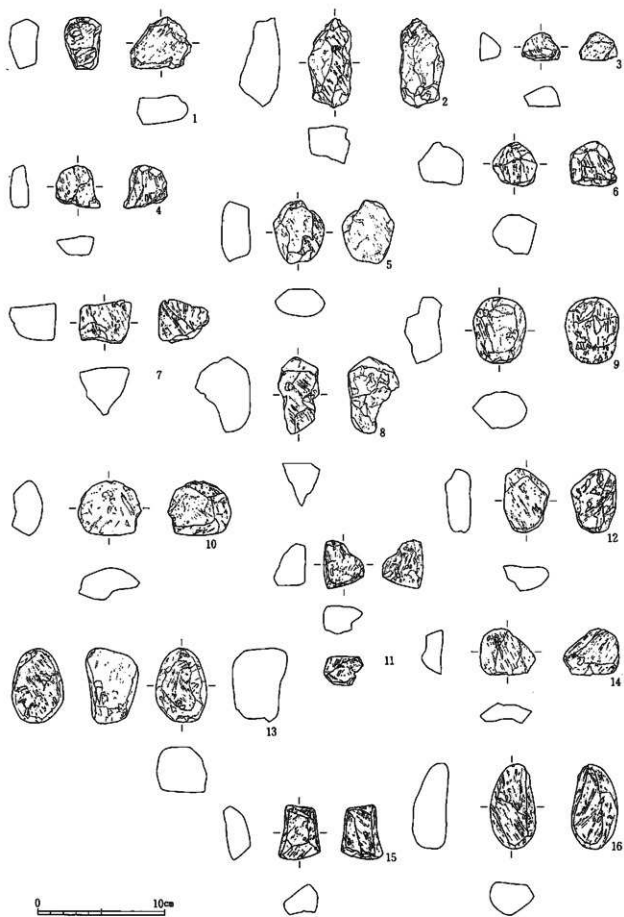
第30図12～15は管玉である。すべて両側穿孔品と思われ、14は孔径がもっとも大きく器壁が薄い。15はきわめて微小なもので、水洗選別によって得られている。16～21は玉製作の行程で生じた剥片である。16・17は角柱状を呈するもので、施溝分割痕が残る微小な18は管玉製品に近似している。施溝分割痕は19にも見られる。22・23は石核で、23は質の悪い部分を残して石材を剝離したものである。

### 3 木器・木製品

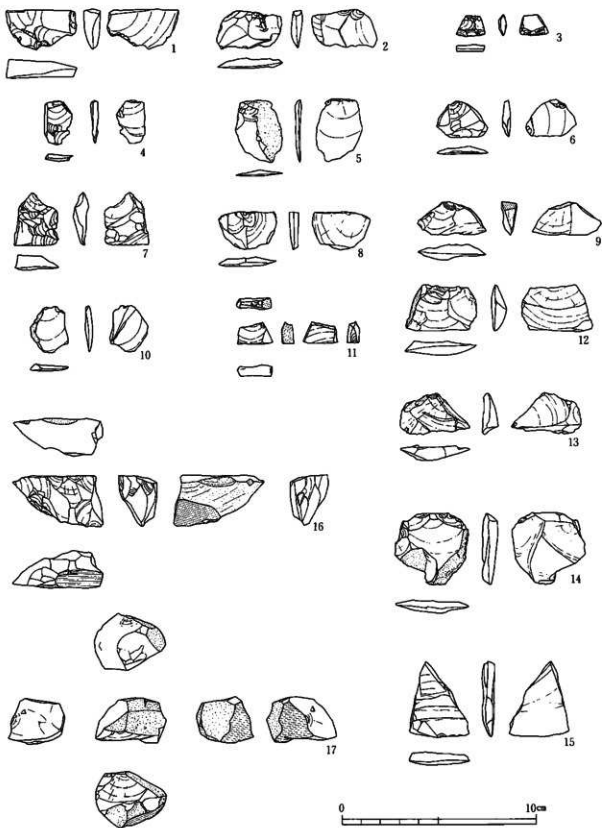
量的には少なく、図化できたのは第31図・第32図（図版15）に掲載した10点である。樹種についてはⅢ3に詳しい。第31図1は薄い板材で、断面は年輪に沿った弧状を呈する。用途は不明だが、水路堰等に用いられた矢板材と推測する。2は細長い角材で端の一方は折れている。3は薄い板材の中程に略方形の孔が穿たれている。折れて深く入り組んだ部分も孔となる可能性があらう。形態から直柄と組合わせる農具で、えぶりか又鎌の類と考えている。4・第32図1は丸木弓である。4は規模的には短弓、形



第27図 石器・石製品 (すり石類) (S=1/3)



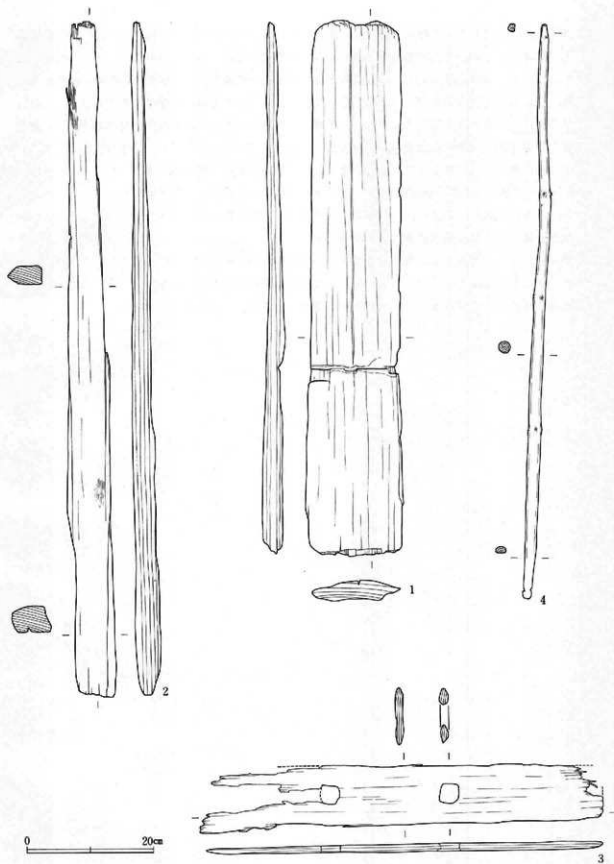
第28図 石器・石製品(怪石) (S=1/3)



第29圖 石器・石製品(剥片・石核) (S-1/2)

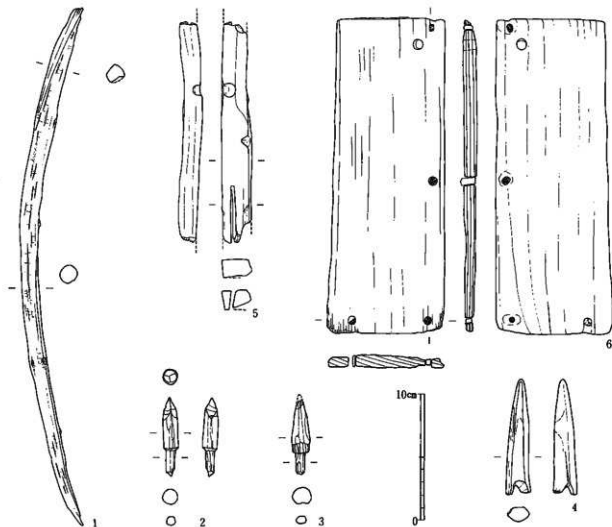


第30圖 石器・石製品（小型打製石器・玉）(s=1/2)



第31图 木器・木製品 (1) (S=1/6)

態的には直弓に分類される。中程に一部樹皮が遺存し、端の一方には両側から切り込んだハズが設けられてい  
 る。第32図1も短弓で、形態は緩い弧状を呈する湾弓である。端の一方は裂けており、もう一方  
 は尖っている。2・3は木鏃である。ともに茎を持つ独来状の形態を呈し、器面に手斧様の調整痕が観  
 察できる。2は先端を三方から削り落として鋭く尖らせている。4も鏃状の製品である。削り込まれた  
 基部で他の製品と組合わさるのかもしれない。木鏃と分類される製品は詳細な用途は不明ながら、北陸  
 では加賀市猫橋遺跡、志雄町萩市遺跡、金沢市梅田B遺跡、富山県上市町江上A遺跡で出土しており、  
 時期的には弥生後期に集中するようである。全国的にも数は多くないが類例はある。ただしその形態は  
 「鏃」と一括して扱うには疑問が残るほどバラエティーに富んでおり、今後詳細に検討されるべきと考  
 える。5は火鏃臼である。両端が折れた細長い角材で、確実な火鏃穴は1箇所である。一方の端には深  
 く細い削り込みが見られ、何かの組み合わせ材を転用したものと思われる。火鏃臼が存在することによ  
 って前述した短弓は舞鏃弓となる可能性もある。6は長方形の板材で、板の三隅と長辺のほぼ中央が  
 穿孔され、うち一隅では大小の孔が並ぶ。こうした特徴は組結合の指物箱に見られ、箱の側板となる可  
 能性がある。北陸での類例は僅少で、金沢市畷田遺跡から出土している程度であろう。



第32図 木器・木製品(2) (S=1/3)

## 4 生物遺体

生物遺体は動物、植物に大別できる。動物遺体は小型種の二枚貝の貝殻が1点、動物骨片が183点あり、動物骨片はシカと鑑定されたものが多く、また被熱を窺わせるものも多い。詳細はⅣ2にまとめられている。植物遺体は遺跡の土壌中に無数に含まれていたが、遺物として得られたものは自然木、果実、果核、種子である。詳細はⅣ4、及び自然木の樹種についてはⅣ3にまとめられている。

### 遺物観察表凡例

- [図 No] 左に挿図番号、右に挿図内の遺物番号を表示した。第1図1ならば「1-1」となる。
- [出土位置] 遺構出土の遺物は遺構名、それ以外の遺物は出土したグリッド名を判明している限り表示した。ただし遺構のうちで河川については範囲が広いので両方を併記した。
- [層位] 遺構出土の遺物は覆土、それ以外の遺物は遺跡の基本層序の層位を示した。
- [器種] Ⅴ1～3の文中で示した大まかな分類に準拠した。
- [調整・文様] 土器・土製品について記載した。内外面で大別して外面から示し、「  」で区切った。口縁から底までの各部位は細別して上位から示し、同一部位での調整・文様の重複は施入の古い順に示し、「  」で区切った。構描文については文様種を略称して( )書きした。外面胴部がハケ調整で構描直線文を施している場合は、「外面胴ナデ・構描文(直)」となる。
- [色調] 土器・土製品について記載した。色彩と名称は新版標準土色帳に準拠した。内外面で異なる場合は外面から示した。器面の本来の色調を重視し、被熱、塗彩、付着物、黒斑等の色調は極力除いた。
- [胎土] 土器・土製品についてのみ記載した。粘土地に含有される砂礫の粒径と量、その他特徴的な含有物について主に裸眼で観察した。砂礫は概ね粒径2mm以上をL、1mm前後をM、0.5mm以下をSとし、粉状のものをシルトと表記した。量は多・少の2段階で示した。その他の含有物では角閃石、海綿骨片、雲母、焼土を示した。
- [寸法] 石器・石製品、木器・木製品について記載した。実測図の縦方向をL(長さ)、横方向をW(幅)、奥行きをD(厚さ)として測定。単位はcmで、読みとりは0.1cmまで。欠損品については現存値を( )書きした。
- [石材] 石器・石製品についてのみ記載した。輝石安山岩、緑色凝灰岩、軽石凝灰岩については既報告(県埋文センター1988)の遺物を参考にして安が判断した。その他の石材については小島和夫氏の裸眼及びルーペ(×10前後)を使用した鑑定による。
- [樹種] 木器・木製品についてのみ記載した。Ⅳ3の通り、鈴木三男氏の同定による。
- [重量] 石器・石製品についてのみ記載した。単位はgで、読みとりは0.1gまで。欠損品については現存値を( )書きしたが、剝片・石核についてはそのまま記載した。
- [実測] No] 実測原図の整理番号。遺物にも注記されており、実物との照合の便を図った。
- [備考] 上記の項目で表示できなかった内容で、特記すべきことについて記した。



第3表 土器・土製品観察表

種No.	出土位置	層位	器種	製作・文様	色澤	胎土	実面No.	備考
13-1	土坑	層土上部	甕	外面朱紅・指文跡、内面朱紅、蓮キギミ	灰青陶	砂礫M多、海綿	A3	
13-2	土坑	層土上部・下部	甕	外面ハケ、内面ナデ	灰赤	砂礫LM多、海綿	A1	漆
13-3	土坑	層土上部	甕	外面ナデ・襷紗文、内面ナデ、蓮キギミ	にぶい黄陶	砂礫M多、海綿	A16	
13-4	土坑	層土	甕	外面朱紅・比羅間御落文(直)、内面ナデ、蓮キギミ	にぶい黄陶	砂礫M多	A2	
13-5	土坑	層土	甕	外面比羅間御落文、内面ナデ	にぶい黄陶	砂礫M多、海綿	A24	赤彩痕
13-6	土坑	層土	甕	外面ナデ・襷紗文(直・逆)、刺突、内面ナデ	外面赤灰、内面灰陶	砂礫LM多	A6	
13-7	土坑	層土上部	甕	外面ナデ・襷紗文(直・逆)、内面ナデ	外面赤灰、内面灰陶	砂礫LM多	A5	
14-1	3号溝	層土	甕	外面朱紅・指文跡、内面朱紅	灰青	砂礫LM多、海綿	A45	
14-2	3号溝	層土	甕	外面指文跡・斜行文、内面朱紅	外面灰青陶、内面灰陶	砂礫M多、海綿	A44	
14-3	3号溝	層土	甕	外面襷紗文、内面ナデ	灰青陶	砂礫LM多、海綿	A17	
14-4	3号溝	層土	甕	外面朱紅、内面ナデ	外面にぶい黄陶、内面朱紅	砂礫LM多、海綿	A86	漆
14-5	3号溝	層土	甕	外面ナデ、内面ナデ、扇斜格子柄	灰青陶	砂礫LM多	A52	
14-6	3号溝	層土	甕	外面ヨコナデ・縦内線、内面ヨコナデ・直キギミ	灰黄白	砂礫M多	C5	
14-7	3号溝	層土	甕	外面ヨコナデ・縦内線、内面ヨコナデ・指文跡、蓮キギミ	灰白	砂礫MS多、シルト、海綿、雲母	C4	
14-8	3号溝	層土	甕	外面ヨコナデ・縦内線、内面ヨコナデ・指文跡、蓮キギミ	にぶい黄陶	砂礫MS多	C90	漆
14-9	3号溝	層土	甕	外面ハケ、内面ハケ、蓮ヨコナデ	浅黄陶	砂礫LM多	C54	漆
14-10	3号溝	層土	甕	外面ミガキ、内面ナデ、蓮ヨコナデ	にぶい黄陶	砂礫M多	C8	赤彩痕
14-11	3号溝	層土	鉢	外面ミガキ、内面ミガキ	泥・赤陶	砂礫MS多、シルト	C1	水跡
14-12	3号溝	層土	鉢	外面ハケ・ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ	外面にぶい黄陶、内面灰陶	砂礫LM多、海綿	C2	
14-13	3号溝	層土	鉢	外面ハケ・ヨコナデ、内面ヨコナデ	浅黄陶	砂礫M多	C7	
14-14	3号溝	層土	鉢	外面ミガキ、内面ナデ	泥陶・明灰陶	砂礫MS多、シルト、海綿	C139	
14-15	3号溝	層土	底部	外面ハケ・ナデ、内面ハケ・ナデ	外面灰赤、内面灰陶	砂礫M多	C133	漆
14-16	3号溝	層土	底部	外面ハケ・ナデ、内面ナデ	にぶい黄陶	砂礫M多、シルト、海綿	A10	
14-17	3号溝	層土	底部	外面ナデ、内面ケズリ	外面にぶい黄陶、内面灰陶	砂礫MS少	C3	漆、灰化物
14-18	3号溝	層土	底部	外面ミガキ、内面ナデ	外面にぶい黄陶	砂礫M多	A85	底面油跡
14-19	3号溝	層土	底部	外面ナデ、内面ハケ・ナデ・蓮ミガキ	にぶい黄陶	砂礫M多、海綿	C5	灰化物
15-1	河川(C7区)	シルト～砂礫	甕	外面比羅間、内面ナデ	泥陶	砂礫M多	A40	漆
15-2	河川(F9区)	シルト～砂礫	甕	外面ナデ・比羅間・刺突、内面朱紅	灰青陶	砂礫LM多	A72	
15-3	河川(F9区)	シルト層	甕	外面刺突、内面ナデ	明灰陶	砂礫M多	C142	
15-4	河川(F9区)	シルト～砂礫	甕・鉢	外面ナデ・比羅間、内面ナデ	泥	比羅間・刺突でミダシ	A81	漆、灰化物
15-5	河川(F9区)	シルト～砂礫	甕	外面朱紅・襷紗文(直)、内面ナデ	外面朱紅、内面灰陶	砂礫MS少	C141	
15-6	河川(D8区)	シルト～砂礫	甕	外面朱紅・指文跡、内面ナデ	にぶい黄陶	砂礫M多、海綿	A57	漆
15-7	河川(F9区)	シルト～砂礫	甕	外面ハケ、内面ハケ、蓮キギミ	泥陶	砂礫LM多	A56	漆
15-8	河川(E8区)	シルト～砂礫	甕	外面ハケ、内面ナデ、蓮キギミ	泥陶	砂礫M多	A54	漆
15-9	河川(E8区・F9区)	シルト～砂礫	甕	外面ハケ・ミガキ・刺突、内面ミガキ、扇斜格子キギミ	灰陶	砂礫M多、角閃石	A60	漆
15-10	河川(E8区)	シルト～砂礫	甕	外面ナデ・襷紗文(縦文)、内面ナデ、蓮ミガキ	灰陶	砂礫LM多	A47	
15-11	河川(F9区)	シルト～砂礫	甕	外面ナデ・襷紗文(直)、内面ナデ	泥	砂礫LM多	A66	
15-12	河川(F7区)	シルト～砂礫	甕	外面ナデ・襷紗文(直)、内面ナデ	外面にぶい黄陶、内面明灰	砂礫MS多	A63	
15-13	河川(E9区)	シルト～砂礫	甕	外面ハケ・直線文(直・点・波)、内面ナデ	灰青陶	砂礫MS多	A77	
15-14	河川(E9区)	シルト～砂礫	甕	外面ナデ・直線文(直・点)、内面ハケ	灰赤	砂礫MS少、シルト	A83	漆
15-15	河川(E9区)	シルト～砂礫	甕	外面ナデ・襷紗文(直・点・波)、内面ナデ	灰青陶	砂礫LM多	A31	漆
15-16	河川(E9区)	シルト～砂礫	甕	外面ハケ・襷紗文(直)・刺突、内面ナデ	にぶい黄陶	砂礫MS多	A89	漆
15-17	河川(E9区)	シルト～砂礫	甕	外面ハケ・襷紗文(直)・刺突、内面ナデ	にぶい黄陶	砂礫MS多、シルト	A88	漆
15-18	河川(E8区)	シルト～砂礫	甕	外面襷紗文(直)、内面ナデ、蓮キギミ	灰赤陶	砂礫M多、角閃石	A49	
15-19	河川(E8区)	シルト～砂礫	甕	外面比羅間襷紗文、内面ナデ	にぶい黄陶	砂礫M多	A68	
15-20	河川(E9区)	シルト～砂礫	底部	外面ハケ・ナデ、内面ナデ	外面刺突、内面灰陶	砂礫LM多、角閃石	A28	坑底後穿孔、漆、灰化物
15-21	河川(C7区)	シルト～砂礫	底部	外面ナデ、内面ハケ・ナデ	外面灰白、内面赤陶	砂礫S少	C38	
15-22	河川(E9区)	シルト～砂礫	底部	外面底ナデ、内面ナデ	灰青陶	砂礫LM多	A82	表面面に灰化物
16-1	D10区	下位遺物包含層	甕	外面朱紅・爪刺突・突起、内面朱紅	灰青陶	砂礫M多、海綿	A11	
16-2	D10区	下位遺物包含層	甕	外面ナデ・内帯・片刺、内面朱紅	灰陶	砂礫M多、海綿	A21	
16-3	C10区	下位遺物包含層	甕	外面朱紅・刺突、内面朱紅、蓮キギミ・刺突	泥陶	砂礫LM多	A14	刺突
16-4	C10区	下位遺物包含層	甕	外面ミガキ・区刺突、内面ナデ	泥陶	砂礫M多	A93	漆
16-5	C10区	下位遺物包含層	甕	外面ミガキ・縄文文様・比羅間、内面ミガキ・比羅間	泥陶	砂礫M多	A37	漆
16-6	C10区	下位遺物包含層	甕	外面ナデ・比羅間、内面ナデ	泥陶	砂礫MS多	A92	漆
16-7	B8区	灰化物層	甕	外面ナデ・指文跡・襷紗文、内面朱紅・ナデ	灰赤陶	砂礫LM多	A48	
16-8	C8区	下位遺物包含層	甕	外面ナデ・襷紗文、内面ナデ	泥灰	砂礫LM多、海綿	A46	
16-9	D10区	下位遺物包含層	甕	外面朱紅、内面朱紅、ナデ、蓮キギミ	にぶい黄陶	砂礫LM少、シルト	A27	漆
16-10	E10区	下位遺物包含層	甕	外面朱紅、内面朱紅、蓮キギミ	外面刺突、内面灰陶	砂礫M多、海綿	A39	
16-11	C10区	下位遺物包含層	甕	外面朱紅、内面ナデ	泥陶	砂礫LM多	A24	漆

図No.	出土位置	層位	器種	調査・文様	色調	胎土	実測No.	備考
16-12	D10区	下段遺物包含層	底部	外面割ナデ・底編物圧痕、内面ナデ	外面焼、内面に ぶい焼	砂礫M多、海綿	A18	
16-13	D10区	下段遺物包含層	底部	外面割余痕・底編物圧痕、内面ナデ	にぶい焼	砂礫L多、海綿	A19	
16-14	D10区	下段遺物包含層	底部	外面割余痕・底編物圧痕、内面ナデ	外面黒焼、 内面にぶい焼	砂礫M多、海綿	A20	炭化物
17-1	C10区	下段遺物包含層	壺	外面余痕、内面余痕	黒面焼	砂礫L多	A38	
17-2	C10区	下段遺物包含層	壺	外面ナデ・刺突文・山形文・垂線文(直・ 波)、内面ナデ	外面黒、 内面黒	砂礫M多	A13	窪
17-3	C9区	下段遺物包含層 ~炭化物層	壺	外面ハケ・垂線文(直・波・縦直)、内面ハ ケ	外面にぶい黄 焼、内面灰焼	砂礫M多	A69	窪
17-4	B8区	炭化物層	鉢	外面縁跡文、内面ナデ、端部打文?	灰赤	砂礫L少M多	A42	
17-5	D10区	下段遺物包含層	甕	外面口コナデ・縦凹線・割ハケ、内面口コ ナデ・縦凹線・割ハケ	にぶい黄焼	砂礫M多	C66	17-15と同一個体
17-6	D10区	下段遺物包含層	甕	外面口コナデ・縦凹線、内面口コナデ・割ハ ケ・縦ハケ	にぶい黄焼	砂礫M多	C76	
17-7	D10区	下段遺物包含層	甕	外面口コナデ・縦凹線、内面口コナデ・割ハ ケ	にぶい黄焼	砂礫L少M多	C77	
17-8	B8区	炭化物層	甕	外面口コナデ・縦凹線・割ハケ、内面口コ ナデ・割ハケ・割ケズリ	灰赤焼	砂礫M多	C104	窪
17-9	D10区	下段遺物包含層	甕	外面口コナデ・縦凹線・割ハケ、内面口コ ナデ・割ハケ・割ケズリ	灰赤焼	砂礫M多	C74	窪
17-10	D10区	下段遺物包含層	甕	外面口コナデ、内面口コナデ・割ケズリ	にぶい黄焼	砂礫L少M多、角閃石 、焼土	C75	
17-11	B8区	炭化物層	甕	外面口コナデ・ハケ、内面口コナデ	にぶい黄焼	砂礫L少M多、シルト	C53	窪
17-12	D10区	下段遺物包含層	壺か甕	外面口コナデ、内面口コナデ	灰赤焼	砂礫M少、シルト、 焼土	C61	
17-13	D10区	下段遺物包含層	壺	外面ナデ・凸帯・キザミ、内面ナデ	外面浅黄焼、 内面にぶい焼	砂礫L少M多、焼土、 海綿	C62	
17-14	D10区	下段遺物包含層	罎部	外面ノコナデ・内面ハケ・口コナデ	にぶい黄焼	砂礫M多	C19	透孔
17-15	D10区	下段遺物包含層	底部	外面割ナデ・底ナデ、内面ナデ	にぶい黄焼	砂礫M多	C66	17-5と同一個体?
17-16	E9区	炭化物層	底部	外面割ハケ・ナデ・底記号「X」、内面ナデ	外面黒焼、内 面にぶい黄焼	砂礫M多	C56	外面黒焼が覆う
18-1	D10区	上段遺物包含層	甕	外面余痕・指沈跡、内面余痕	灰赤	砂礫M多、海綿	A4	窪
18-2	D10区	上段遺物包含層	甕	外面余痕・指沈跡、内面ナデ	にぶい黄焼	砂礫L多	A50	
18-3	C10区	上段遺物包含層	甕	外面余痕・指沈跡、内面ナデ	にぶい黄焼	砂礫M多	A87	
18-4	D10区	上段遺物包含層	甕	外面余痕・指沈跡、内面余痕、罫キザミ	黒面	砂礫M多、海綿	A23	窪
18-5	D10区	上段遺物包含層	甕	外面ナデ・圧痕、内面ナデ	灰赤焼、内面に ぶい焼	砂礫L多、海綿	A54	
18-6	C9区・D5区	上段遺物包含層	甕	外面余痕・ナデ・圧痕、内面余痕・ナデ・端 圧痕	灰赤焼	砂礫L多、海綿	A35	
18-7	D10区	上段遺物包含層	壺	外面ナデ・凸帯・圧痕、内面ナデ、端圧痕	にぶい黄焼	砂礫L多、海綿	A22	
18-8	D10区	上段遺物包含層	壺	外面ナデ・垂線文(直・弧・縦直)、刺突、内面 ナデ	にぶい黄焼	砂礫L少M多、角閃石 、海綿	A30	河川と結合
18-9	E8区	上段遺物包含層	壺	外面垂線文(直・弧・縦直)・キザミ、内面 ナデ・罫キザミ	灰赤焼	砂礫M多S少	A51	
18-10	D10区	上段遺物包含層	壺	外面ナデ・沈跡、内面ナデ、端部突	黒焼	砂礫M多	A15	
18-11	C10区	上段遺物包含層	壺	外面ハケ・垂線文(出?)、内面ハケ・ナデ	にぶい黄焼	砂礫L多	A70	
18-12	D10区	上段遺物包含層	壺	外面余痕・垂線文(出?)、内面ナデ	にぶい黄焼	砂礫M多	A75	窪
18-13	E9区	上段遺物包含層	壺	外面垂線文(直・直)、内面ナデ	焼灰	砂礫L多、焼土塊	A73	
18-14	D10区	上段遺物包含層	壺	外面沈跡・突刺、内面ナデ	外面にぶい焼、 内面黒焼	砂礫M少	A59	穿孔
18-15	G6区	上段遺物包含層	壺	外面ナデ・沈跡・刺突突塊、内面ナデ	外面黒焼、内 面にぶい焼	砂礫L多	A7	窪
18-16	C9区・C10区	上段遺物包含層	鉢	外面余痕、内面ナデ・縁跡文、罫キザミ	灰赤焼	砂礫L多	A41	
18-17	C9区	上段遺物包含層	底部	外面割ナデ・底編物圧痕、内面黒焼	にぶい黄焼	砂礫L多	A90	
18-18	C9区	上段遺物包含層	底部	外面割余痕・底編物圧痕、内面ナデ	外面黒焼、内 面黒焼	砂礫M多S少、海綿	A36	
18-19	F8区	上段遺物包含層	底部	外面割余痕・底編物圧痕、内面ナデ	にぶい黄焼	砂礫L多、海綿	A55	
18-20	C10区	上段遺物包含層	底部	外面ナデ、内面ナデ	縁灰赤	砂礫M多	C116	
18-21	D8区	上段遺物包含層	底部	外面ナデ、内面ナデ	外面にぶい焼、 内面灰焼	砂礫M多、海綿	A65	
19-1	D8区	上段遺物包含層	甕	外面ナデ、内面ナデ、罫口コナデ	黒焼	砂礫M多	C49	窪
19-2	C9区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ・ナデ、内面ハケ・ナデ、罫口コナ デ	表焼	砂礫L少M多	C59	
19-3	C9区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ・垂線文(直)、内面ハケ・ナデ	にぶい黄焼	砂礫M多S多	C51	窪
19-4	C9区	上段遺物包含層	甕	外面ナデ?内面ハケ・ナデ、罫キザミ	灰赤焼	砂礫M多S少	A33	窪
19-5	C9区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ、内面ハケ、罫口コナデ	にぶい黄焼	砂礫M多S少	A8	窪
19-6	D10区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ、内面ナデ、罫キザミ	浅黄焼	砂礫L少S多、海綿	C52	
19-7	F7区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ、内面ハケ・ナデ、罫キザミ	にぶい黄焼	砂礫M多	A62	窪
19-8	C6区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・割ハケ、内面ハケ、罫キザ ミ	にぶい黄焼	砂礫M少S多	A9	
19-9	D10区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ、内面ナデ・縁跡キザミ	にぶい黄焼	砂礫M多、角閃石	A12	窪
19-10	F8区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ、内面ハケ・ナデ・垂線文(直)、 罫キザミ	灰焼	砂礫M多	A43	窪
19-11	F8区	上段遺物包含層	壺	外面ハケ・ナデ、内面ハケ・木目押註、罫キ ザミ	にぶい黄焼	砂礫M多、シルト	A53	
19-12	D10区	上段遺物包含層	壺	外面ナデ、内面ナデ、罫キザミ	にぶい黄焼	砂礫L多	A26	14-5と同一個体 か
19-13	D7区	上段遺物包含層	壺	外面ハケ、内面ハケ、罫キザミ	外面黒焼、 内面にぶい焼	砂礫M多、シルト	A61	
19-14	C9区	上段遺物包含層	甕	外面垂線文(直・縦・斜短)、内面ハケ	にぶい黄焼	砂礫M多、シルト	A80	窪
19-15	C9区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ・垂線文(直)、内面ハケ・ナデ	灰赤	砂礫M多	A29	窪
19-16	E9区	上段遺物包含層	壺	外面ハケ・ナデ・凸帯・キザミ、内面黒焼	にぶい黄焼	砂礫M多、角閃石、 海綿	A76	

図No.	出土位置	科 位	器 種	調性・文様	色 調	胎 土	表面No.	備 考
19-17	C7区	上段遺物包含層	甕	外面磨擦文(直・波)、内面磨擦	灰黒	砂礫少量多	A67	煤、炭化物
19-18	E7区	上段遺物包含層	甕	外面磨擦文(直・波)、内面ハケ・ナデ	にぶい黄褐色	砂礫量多、シルト	A71	
19-19	F8区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ・ナデ、磨擦文(直)・刺突状肌、内面ハケ・ナデ	浅黄褐色	砂礫量多	A64	
19-20	B9区	上段遺物包含層	甕	外面ハケ・磨擦文(直)、内面ハケ	黒褐色	砂礫少量多	A91	成人品?
19-21	D9区	上段遺物包含層	甕・鉢	外面波線・刺突状肌、内面ナデ	外面赤褐色、内面赤褐色	砂礫量多	A32	
19-22	G8区	上段遺物包含層	底部	外面ハケ・ナデ、内面ナデ	外面にぶい褐色、内面黒	砂礫少量多、シルト、海砂	A78	
19-23	D8区	上段遺物包含層	底部	外面ハケ・ナデ、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫少量多、シルト	A58	
19-24	D10区	上段遺物包含層	底部	外面ハケ・ナデ、内面ナデ	外面明褐色、内面灰褐色	砂礫少量多、角閃石	A79	
19-25	D10区	上段遺物包含層	底部	外面刷ハケ・底ナデ、内面ナデ	外面にぶい褐色、内面にぶい褐色	砂礫少量多、シルト、油粕	A25	
19-26	D9区	上段遺物包含層	底部	外面刷ハケ・底ナデ、内面ハケ	にぶい褐色	砂礫少量多	A34	煤、炭化物
19-27	C9区	上段遺物包含層	底部	外面ハケ・ナデ、内面ナデ	灰黄褐色	砂礫量多、シルト、海砂	C115	
19-28	C7区	上段遺物包含層	底部	外面刷ハケ・ナデ・底ナデ・ヘラ肌、内面磨擦	にぶい黄褐色	砂礫少量多、海砂	C39	
19-29	D10区	上段遺物包含層	底部	外面刷ハケ・底ナデ、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫量多、角閃石	C63	
20-1	C9区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい黄褐色	砂礫量多	C96	
20-2	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい黄褐色	砂礫少量多	C98	
20-3	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、刷ハケ、内面口コナデ・刷付肌	褐色	砂礫量多	C69	
20-4	C7区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい黄褐色	砂礫量多	C119	
20-5	C10区・D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、刷ハケ、内面口コナデ・刷付肌	浅い黄褐色	砂礫量多、シルト、海砂	C68	
20-6	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、刷ハケ、内面口コナデ・刷付肌	明褐色	砂礫量多、珪石	C91	煤
20-7	C10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい黄褐色	砂礫少量多	C84	煤
20-8	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	黄褐色	砂礫量多	C94	
20-9	D7区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい褐色	砂礫量多	C126	煤
20-10	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい黄褐色	砂礫量多	C71	
20-11	B9区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、刷ハケ、内面口コナデ・刷付肌	灰白	砂礫量多	C105	
20-12	C9区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	灰白	砂礫量多	C140	煤
20-13	F7区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	刷付肌	砂礫量多	C136	
20-14	C10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、刷ハケ、内面口コナデ・刷付肌	浅黄褐色	砂礫量多	C83	
20-15	C10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい褐色	砂礫量多	C97	
20-16	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい褐色	砂礫量多	C78	煤
20-17	D8区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	灰褐色	砂礫少量多	C93	煤
20-18	C9区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい褐色	砂礫量多	C109	煤
20-19	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	浅黄褐色	砂礫量多、シルト、海砂	C79	
20-20	C9区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	灰白	砂礫量多	C95	煤
21-1	D9区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	灰褐色	砂礫量多	C111	
21-2	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい黄褐色	砂礫量多	C88	
21-3	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	明褐色	砂礫量多、海砂	C87	煤
21-4	D8区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	にぶい黄褐色	砂礫量多	C117	煤
21-5	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	明褐色	砂礫量多	C45	
21-6	F6区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、刷ハケ、内面口コナデ・刷付肌	砂礫量多	砂礫量多	C72	煤
21-7	C8区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、刷ハケ、内面口コナデ・刷付肌	にぶい黄褐色	砂礫量多	C65	煤
21-8	D6区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、内面口コナデ・刷付肌	浅黄褐色	砂礫量多	C9	
21-9	C9区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ・刷付肌、刷ハケ、内面口コナデ・刷付肌	明褐色	砂礫量多	C101	
21-10	B7区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ、内面口コナデ	にぶい赤褐色	砂礫量多、シルト、海砂	C132	
21-11	C7区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ、内面口コナデ・刷付肌	灰褐色	砂礫量多	C124	煤
21-12	D10区	上段遺物包含層	甕	外面口コナデ、内面口コナデ	灰黄褐色	砂礫量多	C80	

図No.	出土位置	層位	器種	調整・文様	色調	胎土	天明No.	備考
21-13	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	褐色	砂礫M多、海綿	C89	煤
21-14	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	にぶい黄褐色	砂礫M多、海綿	C128	煤
21-15	D9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・胴ケズリ	明褐色	砂礫L少M多、海綿	C106	煤
21-16	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	灰黄褐色	砂礫L少M多	C92	
21-17	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・頸ハケ	にぶい黄褐色	砂礫M少、シルト、角閃石	C102	
21-18	E7区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・頸ハケ、内面ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい黄褐色	砂礫L少M多	C131	煤
21-19	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・頸ハケ、内面ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい黄褐色	砂礫M多、海綿	C138	煤
21-20	F18区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	にぶい黄褐色	砂礫M多	C82	
21-21	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・頸ハケ、内面ヨコナデ・胴ケズリ	灰黄褐色	砂礫M多	C103	煤、炭化物
21-22	E9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・頸ハケ・胴ケズリ	明褐色	砂礫M多、シルト、海綿	C107	
22-1	D9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・キギリ、内面ヨコナデ	灰褐色	砂礫M多	C125	
22-2	F8区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・キギリ、内面ヨコナデ	灰褐色	砂礫M多	C17	
22-3	E8区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・キギリ、内面ヨコナデ	黄褐色	砂礫M多	C84	煤
22-4	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	淡褐色	砂礫M多	C86	
22-5	C7区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・頸ハケ、内面ヨコナデ・胴ケズリ	黄褐色	砂礫M多、シルト、海綿	C66	煤
22-6	C10区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・頸ハケ、内面ヨコナデ・ヨコナデ・胴ナデ	淡黄	砂礫M多、角閃石	C113	煤
22-7	D10区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・ヨコナデ、内面ヨコナデ・ヨコナデ・胴厚減	にぶい黄褐色	砂礫M多、シルト、焼土	C50	煤
22-8	E8区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	褐色	砂礫L少M多、海綿	C10	煤
22-9	D6区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・頸ハケ、内面ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい黄褐色	砂礫M多、角閃石、海綿	C110	煤
22-10	D10区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・胴厚減・胴ミガキ、内面ヨコナデ・胴ナデ	褐色	砂礫M少多、シルト	C100	
22-11	C7区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・胴厚減、内面ヨコナデ・指圧痕、胴ケズリ	褐色	砂礫M多、海綿	C120	煤
22-12	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・胴厚減、内面ヨコナデ・指圧痕、胴ケズリ	淡黄	砂礫M多	C99	
22-13	D10区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・胴厚減、内面ヨコナデ	褐色	砂礫M多	C123	赤彩
22-14	D10区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・指圧痕・胴ケズリ	明褐色	砂礫L少M多、海綿	C70	煤
22-15	H4区・M区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・胴ケズリ	灰黄褐色	砂礫M多、シルト、海綿	C12	煤
22-16	D10区	上段遺物包含層	壺	外面ヨコナデ・胴ナデ、内面ヨコナデ・胴ナデ・胴ケズリ	にぶい黄褐色	砂礫M多、シルト、海綿	C60	
22-17	E8区	上段遺物包含層	壺	外面厚減、内面ミガキ	にぶい黄褐色	砂礫L多、シルト、焼土、海綿	C42	
22-18	D8区	上段遺物包含層	壺	外面ナデ、内面ナデ	外面にぶい黄褐色、内面褐色	砂礫M少、シルト、焼土、海綿	C47	凸帯彫刻
22-19	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ハケ、内面ハケ・ナデ	にぶい黄褐色	砂礫L少M多、海綿	C11	
22-20	H4区	上段遺物包含層	壺	外面厚減、内面ナデ・上板	にぶい黄褐色	砂礫M少、シルト、海綿	C14	
22-21	B8区	上段遺物包含層	壺	外面ハナ・腰筋文(流)、内面ナデ	灰褐色	砂礫M多	C108	煤
22-22	E9区	上段遺物包含層	壺	外面ナデ・腰筋文(流)、胴行突、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫M多	C15	
22-23	C10区	上段遺物包含層	壺	外面ミガキ、内面ミガキ	外面褐色、内面淡黄褐色	砂礫M少	C36	
22-24	C9区	上段遺物包含層	壺	外面ミガキ、内面ナデ	褐色	砂礫M少	C81	赤彩、二方堂孔
23-1	C7区・C8区	上段遺物包含層	鉢	外面厚減、内面厚減	にぶい黄褐色	砂礫M少多、シルト、焼土	C33	
23-2	C9区	上段遺物包含層	鉢	外面ミガキ、内面ミガキ	淡褐色	砂礫M少、シルト	C33	
23-3	D9区	上段遺物包含層	鉢	外面ミガキ、内面ミガキ	赤褐色	砂礫M少、シルト、焼土、海綿	C34	赤彩
23-4	C8区	上段遺物包含層	鉢	外面厚減、内面ミガキ	灰黄褐色	砂礫M多、シルト、海綿	C37	赤彩
23-5	D6区	上段遺物包含層	鉢	外面ミガキ、内面ミガキ	にぶい黄褐色	砂礫LM少、シルト、海綿	C52	
23-6	C9区	上段遺物包含層	鉢	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	明褐色	砂礫M多、角閃石	C85	煤
23-7	E7区	上段遺物包含層	鉢	外面ミガキ、内面厚減	灰黄褐色	砂礫M多	C12	台脚付き
23-8	D9区	上段遺物包含層	鉢?	外面彫刻指痕、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫M多、シルト、海綿	C22	角底?
23-9	C8区・D8区	上段遺物包含層	高杯	外面ミガキ、内面ミガキ	にぶい黄褐色	砂礫M少、シルト、海綿	C29	杯蓋
23-10	D10区	上段遺物包含層	高杯	外面ミガキ、内面厚減	外面淡黄褐色、内面淡褐色	砂礫M少、シルト、焼土、海綿	C24	杯蓋
23-11	B8区	上段遺物包含層	高杯	外面ミガキ、内面ミガキ	にぶい黄褐色	砂礫M少、S多	C21	杯蓋、赤彩、口縁彫刻
23-12	G6区	上段遺物包含層	高杯	外面ミガキ、内面ミガキ	淡黄	砂礫M少、海綿	C30	杯蓋、指す付き
23-13	C8区	上段遺物包含層	高杯	外面ミガキ、内面ヨコナデ・腰キギリ	にぶい黄褐色	砂礫M多S多	C127	脚蓋、炭化物
23-14	C8区	上段遺物包含層	高杯	外面ヨコナデ・ミガキ、内面ヨコナデ・腰キギリ	にぶい黄褐色	砂礫M少S多	C23	
23-15	C7区	上段遺物包含層	高杯	外面ミガキ、内面ヨコナデ	灰黄褐色	砂礫M少、シルト、海綿	C30	脚蓋、透孔
23-16	C9区	上段遺物包含層	高杯	外面ミガキ、内面杯ミガキ・胴ケズリ	にぶい黄褐色	砂礫M少S多	C28	脚蓋、透孔三方
23-17	C8区	上段遺物包含層	高杯	外面ミガキ、内面ケズリ・ナデ・ハケ	灰黄褐色	砂礫M多	C27	脚蓋
23-18	D9区	上段遺物包含層	高杯	ミガキ・腰筋・刺突	灰黄褐色	砂礫M少	C26	光頭部

図No.	出土位置	層位	器種	調査・支那	色調	胎上	天圖No.	備考
23-19	C9区	上位遺物包含層	器台	外面ヨコナデ・縦四角、内面ヨコナデ	灰黄緑	砂礫M少S多	C57	器台付蓋、蓋、炭化物
23-20	D10区	上位遺物包含層	器台	外面ミガキ、内面ミガキ	にぶい黄緑	砂礫M S多、シルト、海綿	C122	器台付蓋、甬溝、透孔
23-21	C6区	上位遺物包含層	器台	外面ミガキ、内面ヨコナデ	にぶい黄緑	砂礫M多	C31	甬部、透孔四方
23-22	C9区	上位遺物包含層	器台	外面ミガキ、内面ナデ	にぶい黄緑	砂礫M少S多、シルト、海綿	C137	甬部、炭化物
23-23	B8区	上位遺物包含層	器台	外面ミガキ・縦四角、内面ヨコナデ・ナズリ	淡黄	砂礫M多、シルト、海綿	C18	甬部、透孔、四方?
23-24	D6区	上位遺物包含層	土製品	外面ハケ、内面ナデ	外面灰黄、内面黄緑	砂礫M多、シルト、海綿	C130	穿孔、結晶草
23-25	D6区	上位遺物包含層	土製品	外面ハケ、内面ハケ	にぶい黄緑	砂礫M S多	C129	結晶草・炭化物
23-26	D8区	上位遺物包含層	土製品	ナデ	灰黄	砂礫M多、海綿	C73	穿孔
24-1	D10区	上位遺物包含層	底部	外面ハケ、内面ナズリ	にぶい黄緑	砂礫M多	C58	
24-2	D10区	上位遺物包含層	底部	外面ハケ、内面ナズリ	にぶい黄緑	砂礫M多、海綿	C64	
24-3	F6区	上位遺物包含層	底部	外面ハケ・ナデ、内面ハケ	黄灰	砂礫S多、シルト	C11	煤、炭化物
24-4	D10区	上位遺物包含層	底部	外面ナズリ、内面ナズリ	黄灰	砂礫M多	C134	
24-5	C9区	上位遺物包含層	底部	外面ハケ・底ナデ、内面ハケ	灰黄緑	砂礫M多、シルト、海綿	C114	煤、炭化物
24-6	D10区	上位遺物包含層	底部	外面ハケ、内面ナズリ	灰黄緑	砂礫M多	C57	煤、炭化物
24-7	H4区	上位遺物包含層	底部	外面ミガキ・ナデ、内面薄底	灰黄緑	砂礫M S多、シルト、海綿	C13	煤
24-8	D10区	上位遺物包含層	底部	外面ハケ、内面ナズリ	淡黄	砂礫M多	C135	煤
24-9	H3区	上位遺物包含層	底部	外面ハケ・底ナデ、内面ナデ	黄緑	砂礫M S多、海綿	C16	
24-10	D8区	上位遺物包含層	底部	外面ハケ、内面ナズリ	灰黄緑	砂礫M多	C40	煤
24-11	D9区	上位遺物包含層	底部	外面ナズリ、内面ナズリ	灰黄緑	砂礫M多	C121	
24-12	調査区周辺	採集	壺	外面ヨコナデ・縦四角・横ハケ、内面ヨコナデ・底ナデ・横四角・横ハケ・側ナズリ	黄緑	砂礫M S少、シルト、焼土、海綿	C55	
24-13	調査区	採集	壺	外面ヨコナデ、内面ハケ・ヨコナデ	黄灰	砂礫M多、海綿	C43	
24-14	調査区	採集	器台	外面ミガキ・縦内縁、内面ミガキ	灰白	砂礫M少S多、角閃石	C44	器台付蓋
24-15	調査区	砂土採集	器台	外面ハケ・ミガキ・縦内縁、内面ハケ・ミガキ	灰黄	砂礫M少S多、角閃石	C118	器台付蓋、赤粉
24-16	調査区周辺	採集	器台	外面ミガキ、内面ミガキ、薄キズミ	淡黄	砂礫M少、シルト、焼土	C25	器台付蓋

第4表 石器・石製品観察表

図No.	出土位置	層位	器種	寸法(L×W×Dcm)	重量	石材	実測No.	備考
25-1	D10区	下位遺物区(含む)	磨製石斧	17.3×5.8×4.6	821.6	砂岩	61	編方、装身具?
25-2	D9区	下位遺物区(含む)	磨製石斧	(11.4)×6.2×4.4	(446.7)	安山岩	62	
25-3	D7区	下位遺物区(含む)	打製石斧	23.1×13.2×2.2	1164.2	角礫凝灰岩	63	
25-4	C10区	下位遺物区(含む)	打製石斧	17.2×11.6×2.9	623.4	安山岩	65	
25-5	C8区	下位遺物区(含む)	打製石斧	(6.0)×(7.8)×(2.8)	(134.7)	凝灰岩	611	
25-6	3号溝	覆土	打製石斧	(11.7)×(6.7)×4.0	(405.7)	安山岩	614	
25-7	D9区	下位遺物区(含む)	打製石斧	(6.3)×(7.0)×1.8	(89.1)	凝灰岩	652	
25-8	土塁	土塁	打製石斧	(7.0)×(4.0)×1.0	(286.5)	安山岩	615	
25-9	C10区	下位遺物区(含む)	打製石斧	(9.14)×10.9×1.9	(258.7)	凝灰岩	619	
25-10	D9区	下位遺物区(含む)	打製石斧	(12.1)×8.9×3.8	(531.8)	安山岩	618	
25-11	C10区	下位遺物区(含む)	打製石斧	(13.6)×12.3×3.4	(386.5)	凝灰岩	627	
26-1	D8区	炭化燻	燻石	14.7×8.8×2.8	419.3	安山岩	612	刃部使用痕
26-2	D9区	宮笠等一基層部	燻石	7.4×9.1×1.7	118.6	安山岩	610	
26-3	D9区	基礎部直上	燻石	9.1×12.9×2.2	178.7	礫石安山岩	636	26-5とセット出土
26-4	D9区	基礎部直上	石積	8.0×14.1×5.9	557.6	礫石安山岩	635	26-4とセット出土
26-5	D8区	上位遺物区(含む)	燻石	(3.8)×(3.2)×1.1	(33.7)	片岩	628	
26-6	B9区	炭化物燻	燻石	(5.9)×(7.8)×1.6	(70.9)	片岩	652	
26-7	B9区	上位遺物区(含む)	燻石	(7.0)×(6.3)×5.4	(147.3)	凝灰岩質頁岩	627	
26-8	河川 (B9区)	シルト・砂層	燻石	8.2×3.2×2.0	(167.4)	凝灰岩	663	
27-1	C8区	下位遺物区(含む)	すり石盤	12.6×8.8×4.6	728.7	凝灰岩	616	
27-2	B9区	宮笠等一基層部	すり石盤	3.4×8.3×4.1	386.1	砂岩	613	西面凹み
27-3	C10区	下位遺物区(含む)	すり石盤	16.3×8.8×5.5	1121.5	右長安山岩	614	
27-4	河川 (B9区)	シルト・砂層	すり石盤	12.4×10.0×5.2	1367.4	安山岩	615	
27-5	河川 (D7区)	シルト層	すり石盤	14.1×12.3×5.7	1345.6	安山岩	634	
28-1	3号溝	覆土	燻石	4.1×4.8×2.9	13.4	礫石凝灰岩	626	
28-2	不明	不明	燻石	7.1×3.4×3.1	21.2	礫石凝灰岩	626	
28-3	C8区	上位遺物区(含む)	燻石	3.0×2.2×1.6	2.4	礫石凝灰岩	631	
28-4	C8区	上位遺物区(含む)	燻石	3.4×3.5×1.5	2.5	礫石凝灰岩	636	
28-5	D9区	上位遺物区(含む)	燻石	3.0×3.2×1.4	10.4	礫石凝灰岩	638	
28-6	B8区	上位遺物区(含む)	燻石	3.5×3.5×3.6	9.6	礫石凝灰岩	627	
28-7	D9区	上位遺物区(含む)	燻石	3.5×4.0×3.8	10.7	礫石凝灰岩	637	
28-8	D10区	上位遺物区(含む)	燻石	6.1×3.3×4.0	13.9	礫石凝灰岩	639	
28-9	C8区	炭化燻	燻石	5.3×4.2×2.9	20.2	礫石凝灰岩	635	
28-10	3号溝	覆土	燻石	4.3×5.0×2.4	9.9	礫石凝灰岩	634	
28-11	G8区	上位遺物区(含む)	燻石	3.9×3.2×2.5	8.5	礫石凝灰岩	633	
28-12	D8区	上位遺物区(含む)	燻石	3.1×3.3×2.0	7.7	礫石凝灰岩	629	
28-13	B8区	上位遺物区(含む)	燻石	5.9×4.1×4.3	18.2	礫石凝灰岩	630	
28-14	B8区	上位遺物区(含む)	燻石	3.7×4.4×1.6	4.7	礫石凝灰岩	632	
28-15	C7区	上位遺物区(含む)	燻石	4.4×3.4×2.5	8.7	礫石凝灰岩	628	
28-16	C7区	上位遺物区(含む)	燻石	6.8×3.7×2.7	10.3	礫石凝灰岩	625	
28-17	C9区	上位遺物区(含む)	燻石	2.1×3.7×1.0	7.7	礫石安山岩	644	
28-18	B9区	上位遺物区(含む)	燻石	2.0×3.4×0.6	4.4	礫石安山岩	643	
28-19	C9区	上位遺物区(含む)	燻石	1.1×1.5×0.4	0.7	礫石安山岩	648	タヤビ?
28-20	C10区	上位遺物区(含む)	燻石	2.3×1.8×0.4	1.3	礫石安山岩	649	
28-21	C10区	下位遺物区(含む)	燻石	3.3×2.5×0.4	2.0	礫石安山岩	651	
28-22	B9区	下位遺物区(含む)	燻石	1.8×2.4×0.4	2.1	礫石安山岩	650	
28-23	河川 (B9区)	シルト・砂層	燻石	2.8×2.3×0.8	4.3	礫石安山岩	654	
28-24	C10区	下位遺物区(含む)	燻石	2.0×3.1×0.5	3.2	礫石安山岩	655	
28-25	C10区	下位遺物区(含む)	燻石	1.8×3.0×0.8	3.4	礫石安山岩	656	
28-26	C10区	下位遺物区(含む)	燻石	2.4×2.0×0.4	1.6	礫石安山岩	657	
28-27	C10区	下位遺物区(含む)	燻石	1.2×1.8×0.6	1.6	礫石安山岩	658	
28-28	D8区	上位遺物区(含む)	燻石	2.4×3.7×0.8	9.1	礫石安山岩	655	
28-29	D10区	上位遺物区(含む)	燻石	2.2×3.6×0.8	4.7	礫石安山岩	667	
28-30	河川 (D7区)	シルト・砂層	燻石	3.8×3.9×0.8	9.4	礫石安山岩	657	
28-31	C8区	上位遺物区(含む)	燻石	4.0×3.1×0.7	7.4	礫石安山岩	646	
28-32	C10区	下位遺物区(含む)	石積	2.7×4.8×2.0	23.6	礫石安山岩	650	
28-33	河川 (D7区)	シルト・砂層	石積	2.4×3.7×3.1	28.1	礫石安山岩	664	
30-1	C10区	下位遺物区(含む)	石積	(2.5)×1.5×0.4	(1.6)	礫石安山岩	618	
30-2	河川 (D7区)	シルト層	石積	(3.9)×1.5×0.6	(3.0)	凝灰岩	621	
30-3	河川 (D7区)	シルト・砂層	石積	2.7×1.1×0.5	1.3	礫石安山岩	623	
30-4	3号溝	覆土	石積	2.8×1.1×0.4	1.2	礫石安山岩	617	
30-5	D10区	上位遺物区(含む)	石積	(10.9)×1.0×0.4	(1.2)	礫石安山岩	619	
30-6	D10区	下位遺物区(含む)	石積	3.1×1.6×0.5	1.3	礫石安山岩	666	
30-7	B8区	上位遺物区(含む)	石積	2.3×1.8×0.5	1.4	礫石安山岩	622	
30-8	C7区	上位遺物区(含む)	石積	(3.8)×1.6×0.6	(2.8)	礫石安山岩	620	長さ0.7×幅0.7cm
30-9	C10区	下位遺物区(含む)	石積	4.1×2.3×0.4	1.6	礫石安山岩	626	
30-10	D10区	下位遺物区(含む)	石積	3.8×1.2×1.0	6.5	礫石安山岩	624	用途不明
30-11	D10区	下位遺物区(含む)	石積	(6.1)×(1.0)×(0.6)	(3.0)	礫石安山岩	625	
30-12	B8区	上位遺物区(含む)	管玉	1.3×0.4×0.4	0.3	緑色凝灰岩	629	
30-13	B8区	上位遺物区(含む)	管玉	1.02×0.4×0.4	0.2	緑色凝灰岩	630	
30-14	C9区	上位遺物区(含む)	管玉	1.3×0.4×0.4	0.3	緑色凝灰岩	631	やや風化
30-15	土塁	土塁	管玉	6.9×3.7×0.3	0.1	緑色凝灰岩	632	
30-16	B8区	炭化燻	玉削片	1.1×0.5×0.3	0.3	緑色凝灰岩	621	施注分製
30-17	D10区	上位遺物区(含む)	玉削片	1.3×0.7×0.7	0.6	緑色凝灰岩	623	
30-18	B8区	上位遺物区(含む)	玉削片	1.6×1.2×0.5	0.8	緑色凝灰岩	624	
30-19	D10区	上位遺物区(含む)	玉削片	1.3×1.8×0.3	1.4	緑色凝灰岩	620	施注分製
30-20	H8区	上位遺物区(含む)	玉削片	3.8×2.8×0.7	4.9	緑色凝灰岩	628	
30-21	H8区	上位遺物区(含む)	玉削片	3.5×3.7×1.1	12.3	緑色凝灰岩	622	
30-22	河川 (B9区)	シルト・砂層	石片積	3.7×2.5×2.6	11.3	緑色凝灰岩	669	やや風化
30-23	C9区	下位遺物区(含む)	石片積	6.6×5.1×3.0	91.7	緑色凝灰岩	633	

第5表 木器・木製品観察表

図No.	出土位置	層位	器種	寸法(L×W×Dcm)	器種	実測No.	備考
31-1	河川 (C7区)	シルト・砂層	板材	83.1×15.2×3.3	文青	A-59	埋方?
31-2	H8区	不明	角材	(107.2)×6.4×3.7	ヒノキ	A-61	
31-3	D8区	上位遺物区(含む)	葉目	(63.4)×9.6×1.2	文青	A-47	直納のよぶり又文庫?
31-4	不明	不明	丸木巧	90.8×9.2×1.9	イヌギ	A-60	
31-1	不明	不明	丸木巧	(41.2)×1.6×1.6	イヌギ	A-43	
31-2	G4区	上位遺物区(含む)	木炭	6.3×1.2×1.2	ヒノキ	A-38	長さ1.2×幅0.8cm
31-3	D8区	上位遺物区(含む)	木炭	(60.5)×5.5×1.5	イヌギ	A-39	長さ1.8×幅0.8cm
31-4	H8区	上位遺物区(含む)	木炭	9.2×3.8×0.7	文青	A-43	
31-5	河川 (D7区)	シルト・砂層	天蓋目	(17.5)×2.4×1.5	文青	A-40	
31-6	河川 (D7区)	シルト・砂層	板材	25.0×9.2×2.0	文青	E-41	指節指節板?

## 5 小 結

ここでは出土した遺物の詳しい時期と、それによって知られる遺構の時期について述べたい。弥生土器の編年観は前期をⅠ、中期をⅡ・Ⅲ・Ⅳ、後期をⅤとする5期(様式)区分が定着している。元来は奈良県唐古遺跡の土器様式研究に源を発する畿内編年を各地に並行させたものであったが、近年その枠組みは変化しつつある。北陸においても従来はⅢ期後半とされてきた凹線文系土器波及期をⅣ期に含めた編年案が提示されている(河合1996)。本書ではこの様式区分に、付近の弥生中期遺跡資料を適用させた編年観を用い、出土土器と対比させることによって位置付けを進めていきたい。

Ⅱ期は新相の資料として金沢市矢木ジワリ遺跡33号土坑、同市下安原遺跡101号溝出土土器等をあてる。下安原遺跡資料はⅡ期末～Ⅲ期初の時期とされてきたが、ここではⅡ期に含める。Ⅲ期は松任市野本遺跡S I 01・02出土土器(松任市教委1995)等をあてる。細分は行わない。Ⅳ期は古相として野本遺跡S D 24下層(石川県埋文センター1993)、金沢市上荒屋遺跡S K 95出土土器等をあてる。Ⅱ期古相、Ⅳ期新相は厚川以南の地域では良好な資料が少ない。

出土した弥生中期の土器は、前述したように条痕文系、沈線文系、櫛描文系で主に構成される。条痕文系・沈線文系の土器はⅠ期に遡る可能性を持つ壺(第16図2)を除いてはほぼⅡ期におさめてよい資料である。そして、条痕がナゲ消されたり、多彩な指沈線、綾杉文や櫛描文が施される等、新相に位置付けられるものが目立っている。櫛描文系土器はⅠ期に遡る可能性を持つ壺(第19図4)を除けば、Ⅱ期～Ⅳ期古相にまたがる資料となる。うち、Ⅱ期は第13図6・同7・第19図17・18等、Ⅲ期は第15図10・16・17・第19図5・11等を位置付けてよい。壺第13図6・第17図2・第19図17などは条痕文系・沈線文系土器の影響が見られ、Ⅱ期新相の特徴と思われる。Ⅳ期古相に確定できる資料はない。少量の信州系の土器は、他遺跡での共伴例からⅢ期～Ⅳ期に属するものであろう。

弥生後期の土器はⅤ期末を中心時期とする資料である。大半が包含層資料であるので細別は難しいが、第20図1・第21図11・第23図17・23は形態的にⅤ期後半以前、第22図6～8・20～22はⅤ期末以前にはほとんど組成に含まれない器類であることから古墳前期に位置付けられる。近江系壺も第22図1・2がⅤ期、3が古墳前期に属する可能性が高い。この他にも、識別できなかったがⅤ期末を前後する時期の土器は一定量存在するものと考えている。

以上の出土土器の年代観から、遺構のうち土坑はⅡ期、3号溝はⅤ期末、河川はⅡ期～Ⅳ期の時期に位置付けることができる。ここで注意しておきたいのは3号溝は下位遺物包含層の上面が検出面で、土坑はその下面が検出面となっていることである。下位遺物包含層は中期・後期の土器を含んでおり、3号溝が切り込んでいることから、Ⅱ期～Ⅳ期にかけて堆積したものとわかる。後期の遺物は上位遺物包含層とよく接合する傾向があることから、中心的な形成時期はⅡ期～Ⅳ期で、Ⅴ期を境にして以降は上位遺物包含層の堆積に切り替わったものと考えたい。また、土坑の覆土は下位の、3号溝の覆土は上位の遺物包含層の土質に対応することから、覆土がある程度遺構の時期を反映するようである。出土遺物の少なかった遺構についても、1・4号溝は後期、2号溝は中期の時期である可能性が高い。

その他の遺物の時期については、河川及び土坑から出土したものは弥生中期に位置付けてよい。その他の遺構及び包含層から出土した遺物については、土器の状況から見て弥生後期のものが多いと思われるが、中期のものも混入しており、時期の特定は難しい。石器・石製品については、他遺跡での類例から打製石斧、砥石、すり石類、砺石、玉等の一部がⅤ期末以降も存続するが、その他は中期が中心時期と思われる。木器・木製品については河川出土のものを中期とする以外は時期を特定できない状況である。ただし木炭については、他遺跡での類例から後期の時期と考えている。



























































## VII ま と め

### 1 発掘調査成果の要約

下安原海岸遺跡は金沢市南西部の海岸で、安原砂丘に厚く覆われて存在する。遺跡は風浪による遺物包含層の露頭が契機となって発見され、その後の発掘調査は風浪による消失や損壊からの保護を目的としたもの（昭和45・46・47・48年度）と、自転車道の建設に伴うもの（昭和62年度）が行われている。これまでの調査成果から、遺跡は現在の安原砂丘の形成前に営まれた集落跡であり、その時期は弥生時代を中心とすることが確認されている。今回の発掘調査は災害復旧工事が原因であり、調査区は遺跡の北東部分にあたる。

遺跡を被覆した砂を除去すると、基本層序は上位から植物層、遺物包含層、基盤層、起伏が大きい粗砂層の順に推移する。遺物包含層は調査区南西部では上下に分層され、出土遺物から上位が弥生後期以降、下位が弥生中期以前に堆積したものと思われる。標高は基盤層の上面で0m前後である。

調査の結果、遺構として土坑1基、溝4条、河川1条が検出された。時期は土坑と2号溝が弥生中期、1・3・4号溝が弥生後期と推定される。土坑と3号溝は遺構面の上下でも区別できる。土坑は多量のオニグルミが出土しており、水さらしを目的とするような貯蔵穴となる可能性が高い。4号溝は河川に連なり、幅広なことから排水路的な性格が考えられる。より細めの1～3号溝の性格は不明であるが、3号溝は多くの遺物を伴っている点で、他の溝とは異なる。河川は南東・北西方向に流路をもつが、隣接する昭和62年度調査区と位置関係を照合したところ、その北東端の「谷状の落ち込み」に連続する可能性を示すことができた（第45図）。遺構については比較的希薄な分布状況にあり、調査区が遺跡の縁辺部にあたることが示される。特に河川から北東側については出土遺物も少なく、位置的にも遺跡の北東端となるため、居住域というよりも生産域となる可能性が高い。

出土した遺物は土器、石器・石製品、木器・木製品、生物遺体がある。土器の時期は弥生前期から古墳前期に及ぶ幅があるが、中心は弥生中期・後期、特に中期前半と後期末である。中期前半の弥生土器は、まだまだ類例が少ない県内の資料を補うものと期待する。石器・石製品は大陸系磨製石斧と打製石斧、小形打製石器とその石材、管玉とその石材、すり石類等の、弥生中期の基本的な要素を備えた内容となっている。木器・木製品は弓、箆、箱、転用火鋸白などがある。類例が少ない木篋及び指物箱簡板は特筆すべき存在である。なお、微細な石器・石製品やその石材、及び生物遺体については大半が遺跡土壌の水洗で選別されており、通常の調査方法では得られない貴重な情報と言える。金属器については、これまでの調査では必ず銅鏝が出土していたが、今回は出土しなかった。集落内での扱われ方もよろうが、ここでは前に示した今回の調査区の性格を傍証しているものと考えたい。

発掘調査では、種々の自然科学的分析も実施した。花粉分析では、遺跡土壌からスギ、ナラ、タブノキ、ハンノキ、ヤナギ等の植物が確認された。あわせて行った放射性炭素年代測定では、植物層と、基盤層の直上に位置する炭化物層について、それぞれ $1440 \pm 70$ 年BP、 $2290 \pm 60$ 年BPの年代値（補正）を得た。動物遺体の同定では、出土した小骨片の多くがシカであり、被熱していることが確認された。シカは、弥生時代の集落から出土する動物遺体として最も普遍的な存在である。樹種同定は、出土した自然木及び木器・木製品について行った。自然木にはクロマツ、オニグルミ、ハコヤナギ、クリ、スダジイ等が確認された。木器・木製品はスギ、ヒノキ、イヌガヤが確認され、ヒノキ材は木篋と用途不明材、イヌガヤ材は木篋と丸木弓、スギ材はその他に使われていると判明した。果実・果核・種子等の微

少な植物遺体の同定では多くの種類が確認されているが、そのうちイネ、アサ、ナス、ヒョウタン類、メロン類等が栽培され、食用になったものと推定される。分析成果の中で、植生に関する内容からは、集落が存在した弥生時代の、やや湿地的な周辺環境を復元することができる。特に花粉分析からは、その前後の時期も含めた環境の変化についても検討が及んでいる。

以上が今回の発掘調査成果の要約である。それぞれの成果は、「下安原海岸遺跡」という、遺跡を構成するあらゆる要素がきわめて良好に遺存し、擾乱など後世の影響がほとんどなく、時期も限定できるという、通常ではまず考えられない希有な状況で得られている。今後、弥生時代の集落、生活、環境を復元していく作業には欠かせない基礎資料になるものと考えられる。以下は、周辺の環境も含めた下安原海岸遺跡の変遷の過程を示すことで、まとめにかえたい。

## 2 下安原海岸遺跡の変遷

### 縄文時代以前

弥生時代の遺構の基盤層になるシルト層および、その下位で確認された粗砂層が堆積する。弥生集落の成立前であるから、縄文時代以前に位置付ける。かつて縄文前期末の土器が採集されたという「泥炭層下部の青色粘土層」（橋本1975）が、ここで言う基盤層にあたると思われ、周辺でもっとも古い遺物となっている。一方、本遺跡の南東2kmに位置する上安原遺跡でもほぼ同時期の縄文土器が出土している（石川市町村1997）。本遺跡では氾濫原的で非常に不安定な地形が示されているが、周辺に集落が存在する可能性は高い。縄文前期は縄文海進のピーク期で、現在よりも数m高い海水面が想定されているが、現在の標高との対比では遺跡の分布と周辺の環境は把握できない状況がある。

### 弥生時代前・中期

安定した基盤層の形成とともに、集落が成立する。遺物量から見ると、弥生中期に活動の中心がありそうである。この段階には、付近ではほぼ同時期に展開する下安原遺跡などとほぼ同等の、湿地的な周辺環境が生じている。海岸線および砂丘がより沖側に位置していたのなら、その後背地と見てよい。集落ではイネやその他食物の栽培、石材・木材の確保と加工などの生産活動が行われている。

### 弥生時代後期

集落が継続する。遺物量から見て後期末頃が活動のピーク期にあたる。中期段階と比較すると、遺物量が増加、出土範囲も広がっており、集落規模の拡大が予想される。河川はこの段階にはほとんど埋まって浅い窪地になっている。おそらく流路は別地点に移っているのだろう。これまでの調査で出土した銅線はほとんどがこの段階に属すると思われる。青銅器には儀器的な側面もあるが、石器の減少とも連動しており、ここでは金属器の急速な普及も示すものと考えておきたい。

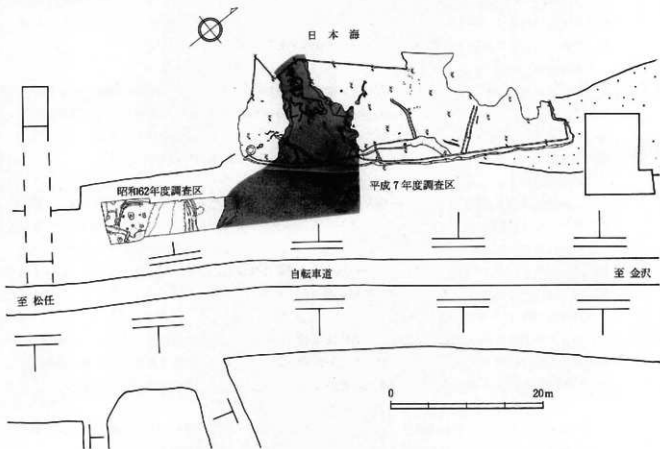
### 古墳時代以降

これまでの調査の出土遺物で見ると、古墳時代の遺物は前期前半ごろまで確認できるが、弥生後期から見ると減衰傾向にあり、集落の衰退を示す。前期後半以降は途絶え、集落は廃絶している。遺物包含層を植物層が被覆しており、急速に湿地化が進行し、その後、砂丘に埋没したものと思われる。

遺跡の変遷を見ると、集落の動向と環境の変化が対応しており、興味深い。因果関係の追求は今後の最大の課題である。また、本遺跡のように時間的な連続性の高い遺跡は堆積土に間層が生じにくいため、本来は遺構面の認識がきわめて難しいことをあらためて知った。こちらは教訓としたい。

参考文献

- 浅井勝郎・浅井善夫「金沢市笠舞縄文遺跡」『石川考古学研究会々誌』第11号 1968年  
 石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会「第5回石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会資料」 1997年  
 石川県教育委員会『石川県遺跡地図』 1992年  
 石川県立埋蔵文化財センター『菅正寺遺跡』 1984年  
 石川県立埋蔵文化財センター『下安原海岸遺跡』 1985年  
 石川県立埋蔵文化財センター『下安原海岸遺跡』 1988年  
 石川県立埋蔵文化財センター『鉄田遺跡』 1991年  
 石川県立埋蔵文化財センター『寺中B遺跡』 1991年  
 石川県立埋蔵文化財センター『石川県松任市野木遺跡』 1993年  
 石川県立埋蔵文化財センター『戸水C遺跡』 1993年  
 石川県立埋蔵文化財センター『北塚遺跡』 1994年  
 石川県立埋蔵文化財センター『戸水B遺跡』 1994年  
 石川県立埋蔵文化財センター『拓影』第48号 1995年  
 石川考古学研究会『石川県考古資料調査・集成年報報告書 武器・武具・馬具Ⅰ』 1996年  
 加賀市教育委員会『藤ノ木遺跡』 1985年  
 金沢市教育委員会『金沢市欠木ジワリ遺跡 金沢市欠木ヒガシウラ遺跡』 1987年  
 金沢市教育委員会『金沢市下安原遺跡』 1990年  
 金沢市教育委員会『上荒原遺跡Ⅰ』 1995年  
 河合 忍「北陸弥生土器様式の変遷過程—器種・用途別の計量分析を中心として—」『石川考古学研究会々誌』第39号 1996年  
 奈良国立文化財研究所『水部集成図録 近畿原帖編』 1993年  
 永井宏幸「北陸文系土器について」『朝日遺跡Ⅴ(土器編・総論編)』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994年  
 羽咋市教育委員会『柴垣須田遺跡』 1980年  
 橋本澄夫「8. 砂丘遺跡」『金沢周辺の第四系と遺跡』北陸第四紀研究グループ 1975年  
 橋本澄夫・荒木繁行「金沢市下安原海岸遺跡の第1次調査」『石川考古学研究会々誌』第18号 1975年  
 藤 則雄「北陸の海岸砂丘」『第四紀研究』第14巻第4号 1975年  
 松任市教育委員会『松任市野木遺跡』 1995年  
 安 英樹「北陸の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル』No.39 1995年



第45図 昭和62年度調査区と平成7年度調査区 (S=1/500)

写 真 图 版



道跡と金沢海岸(南から内灘方向)



調査区全景(南から)



調査区全景(垂直)



河川(東から)



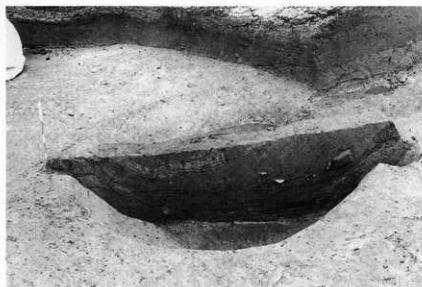
河川東壁土層断面(西から)



河川(西から)



河川畔打製石斧出土状況(南西から)  
打製石斧は第25図3



土坑土層断面(西から)



土坑完掘(北から)





1号溝(西から)



2号溝(西から)



4号溝(北から)



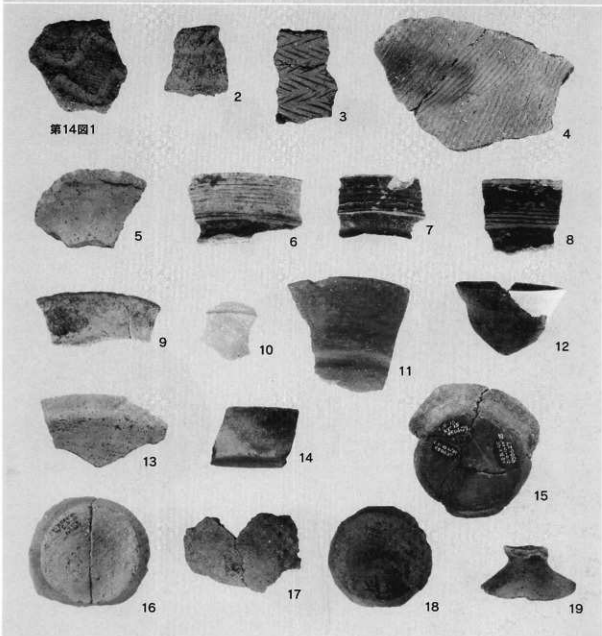
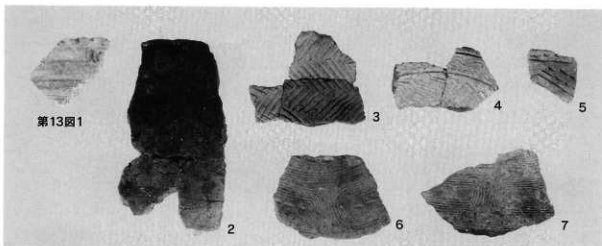
3号溝(西から)



3号溝周辺土層断面(南西から)

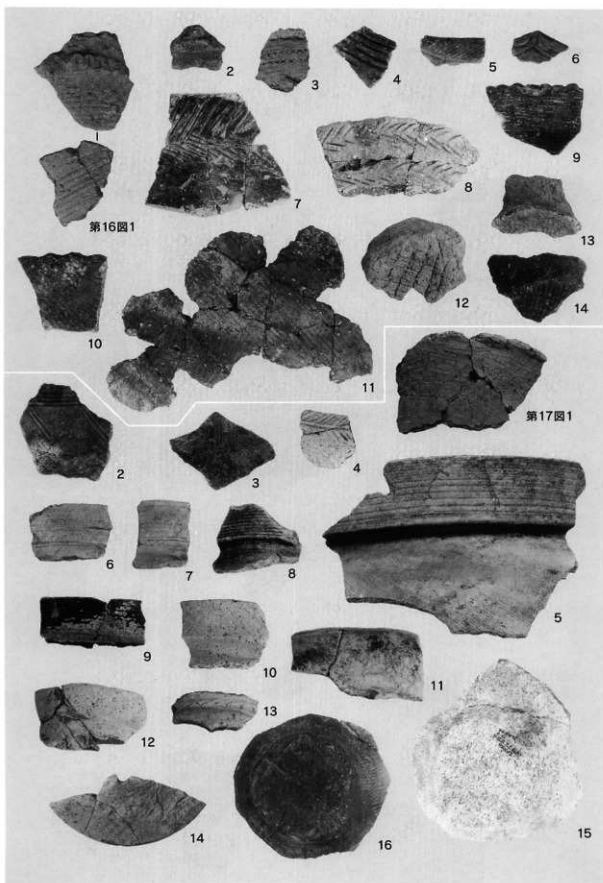


3号溝(東から)

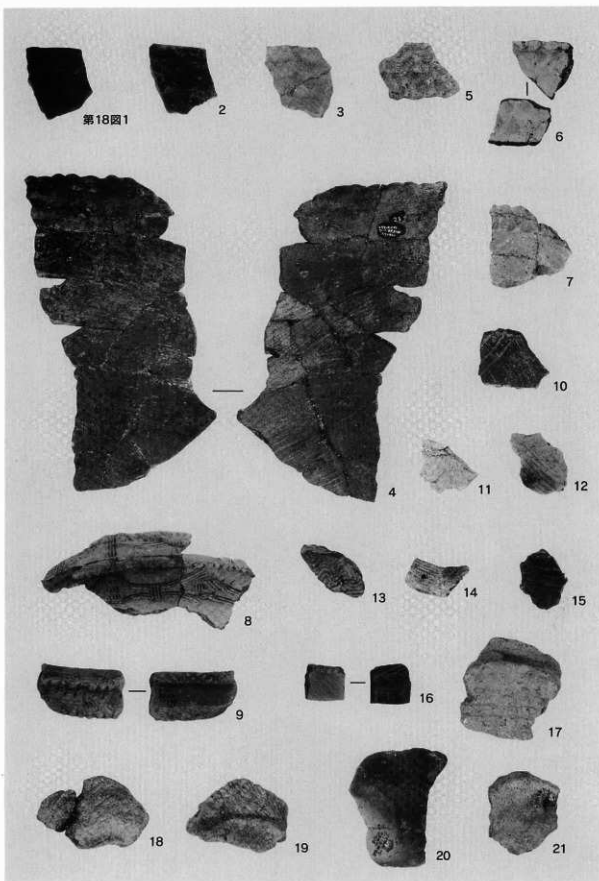


土坑·3号溝出土土器

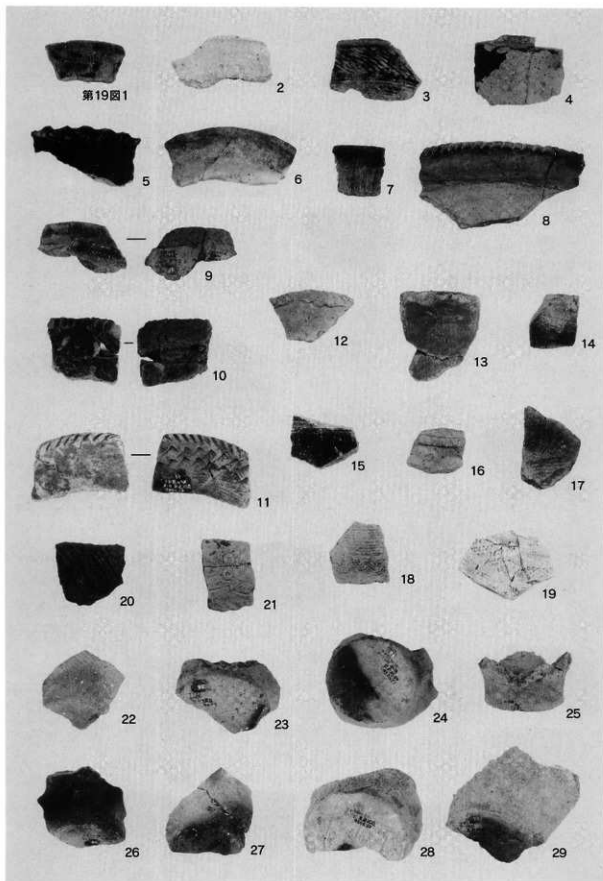




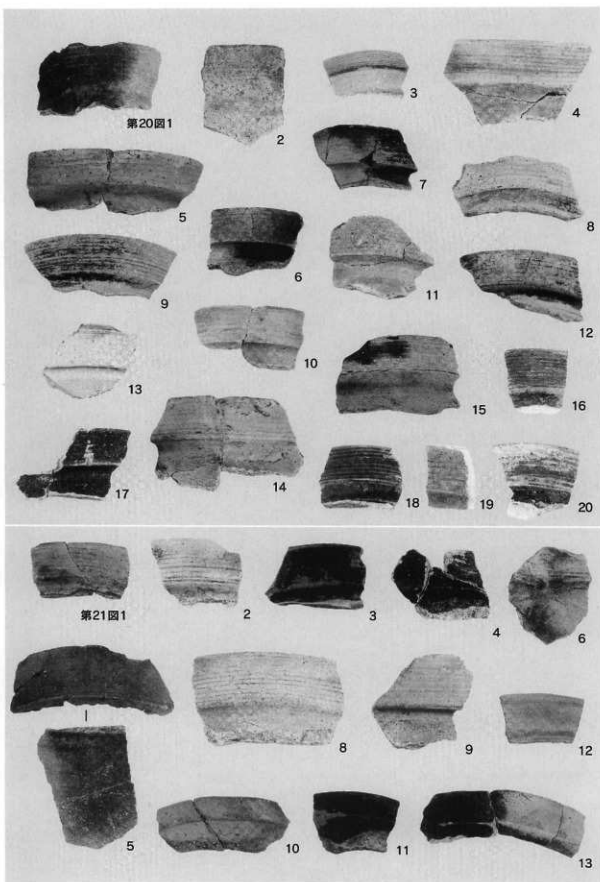
下位遺物包含層・炭化物層出土土器



上位遺物包含層出土土器(1)

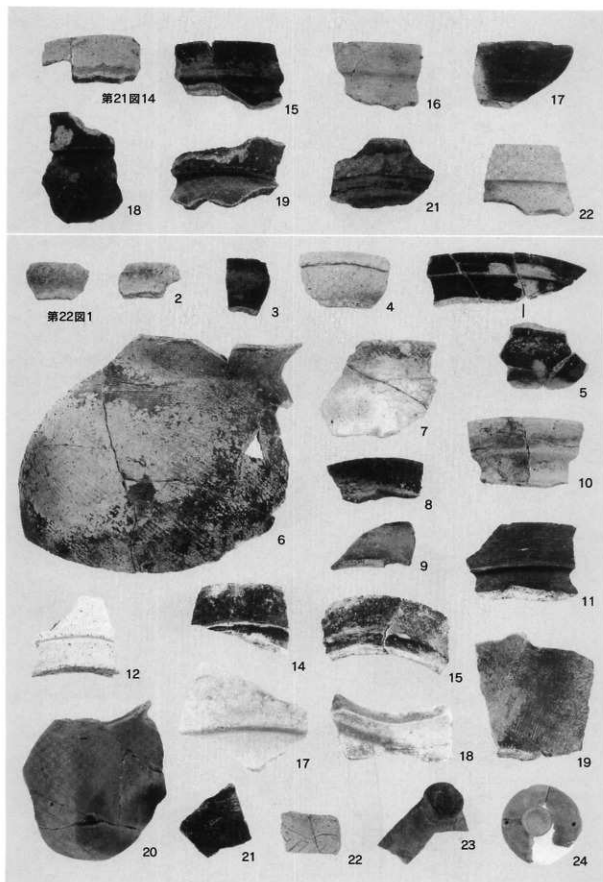


上位遺物包含層出土土器(2)

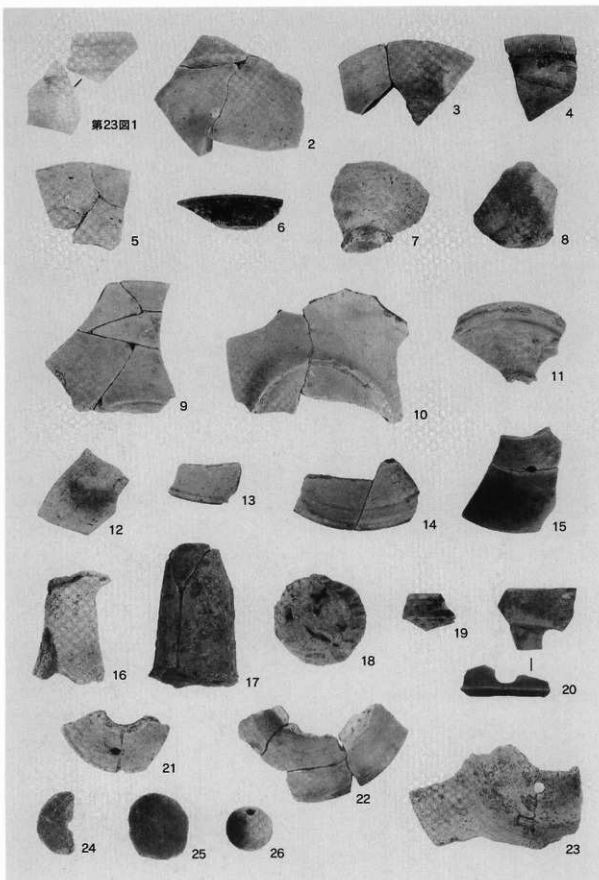


上位遺物包含層出土土器(3)

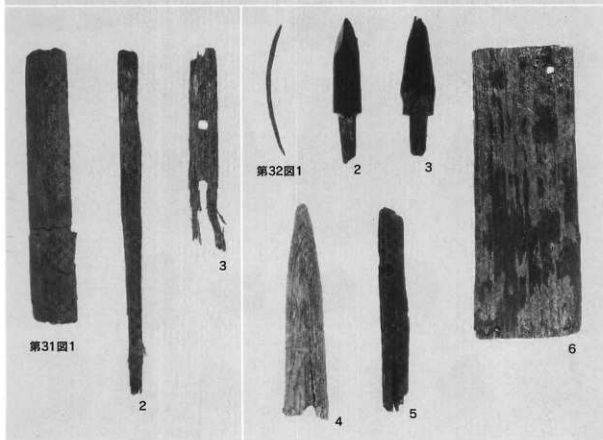
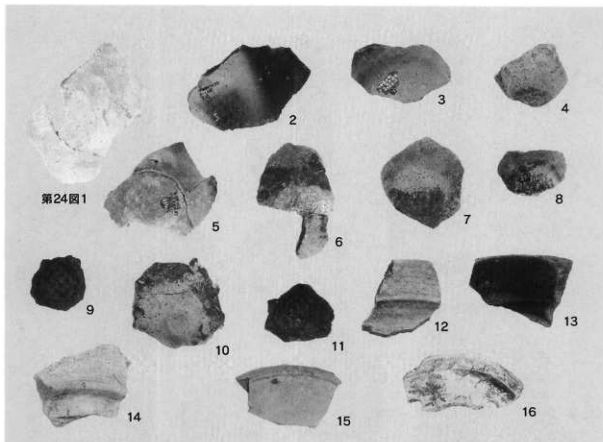




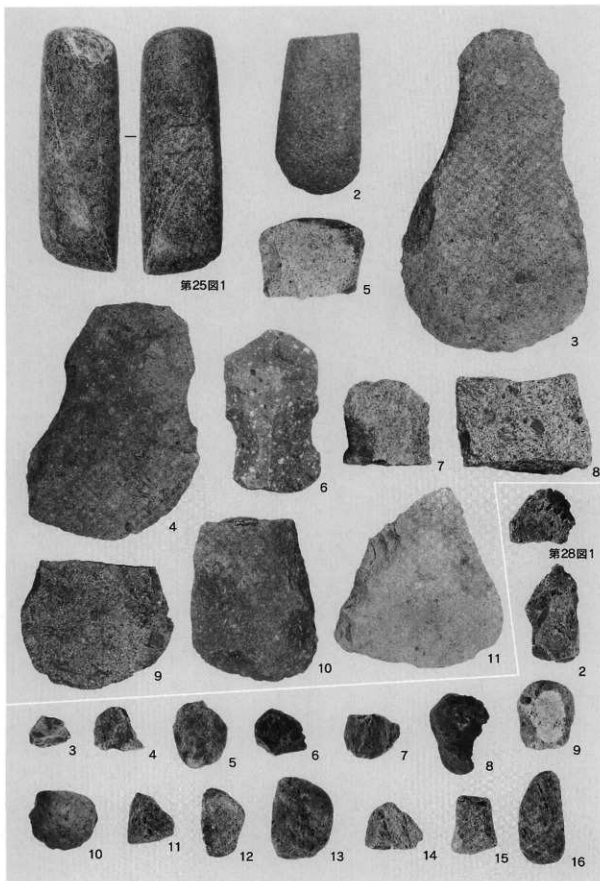
上位遺物包含層出土土器(4)



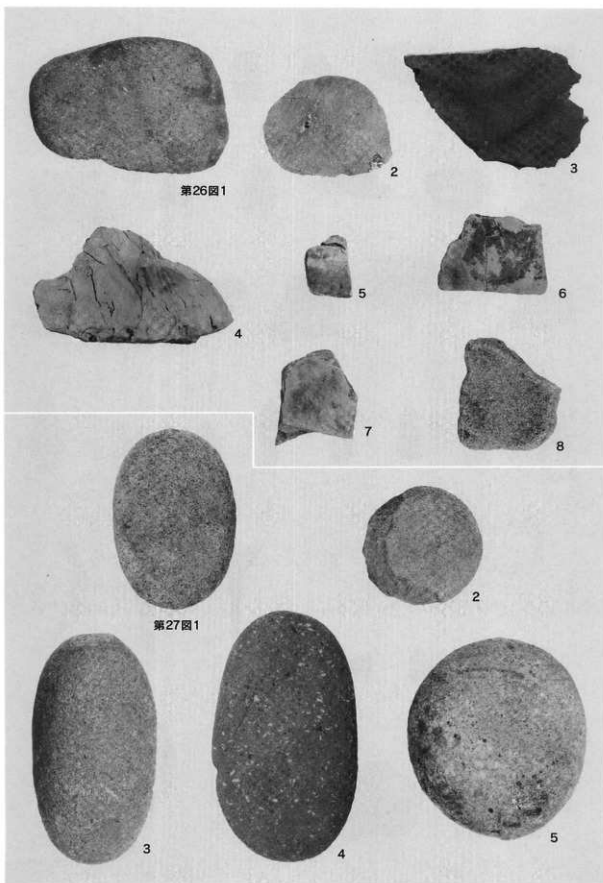
上位遺物包含層出土土器(5)



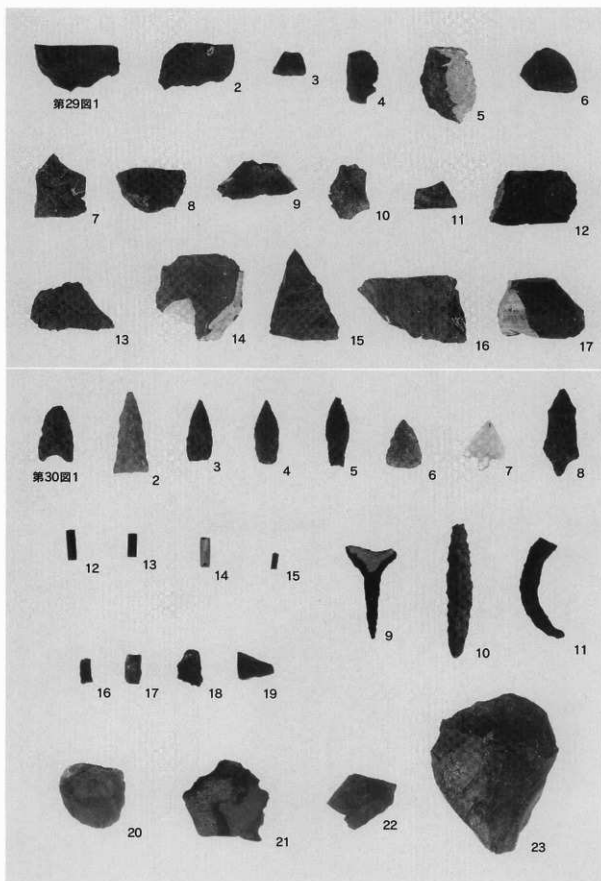
その他土器・木器・木製品



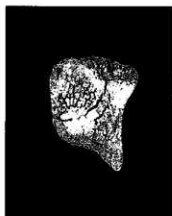
石器・石製品(1)



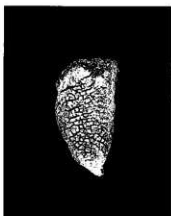
石器·石製品(2)



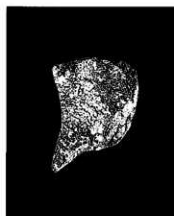
石器・石製品(3)



1a



1b



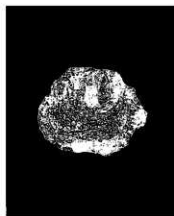
1c



2a



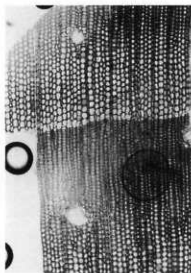
2b



3

- 1a ニホンジカ右膝蓋骨(内側)  
 1b ニホンジカ右膝蓋骨(関節側)  
 1c ニホンジカ右膝蓋骨(外側)  
 2a ニホンジカ左脛骨骨体上部の内側縁～前縁付近破片(骨表面)  
 2b ニホンジカ左脛骨骨体上部の内側縁～前縁付近破片(髓腔面)  
 3 ナミマガシワガイ貝殻(外面)

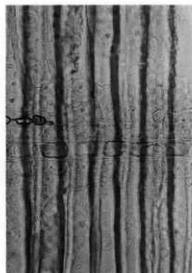
S = 1/4



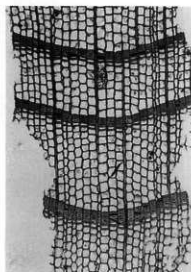
1a. クロマツ ISF-3296 C×40.



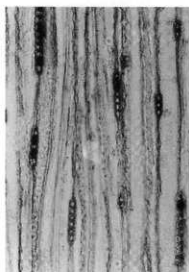
1b. 同 T×100.



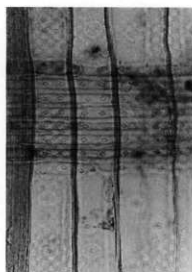
1c. 同 R×400.



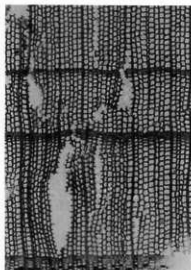
2a. スギ ISF-3320 C×40.



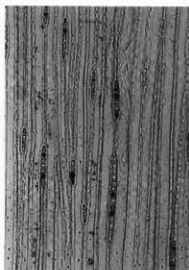
2b. 同 T×100.



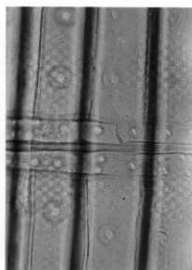
2c. 同 R×400.



3a. ヒノキ ISF-3317 C×40.

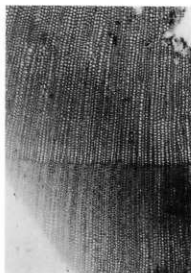


3b. 同 T×100.



3c. 同 R×400.





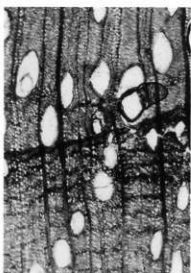
4a. イスガヤ ISF-3319 C×40.



4b. 同 T×100.



4c. 同 R×400.



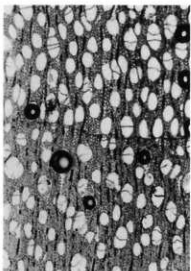
5a. オニグルミ ISF-3309 C×40.



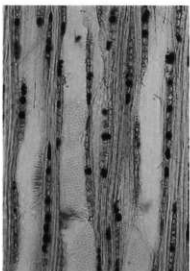
5b. 同 T×100.



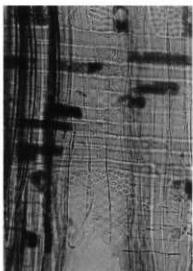
5c. 同 R×200.



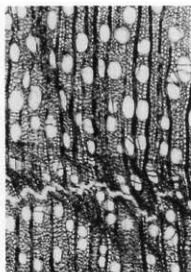
6a. ハコヤナギ属 ISF-3293 C×40.



6b. 同 T×100.



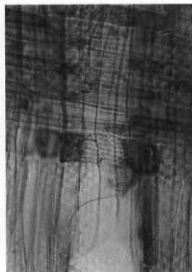
6c. ヤナギ属 幹材 ISF-3312 R×200.



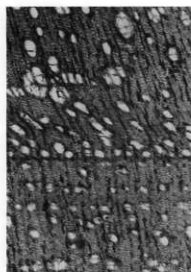
7a. ヤナギ属 幹材 ISF-3312 C×40.



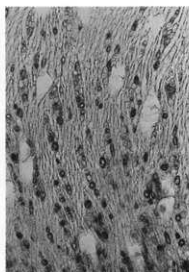
7b. 同 T×100.



7c. ハコヤナギ属 ISF-3293 R×200.



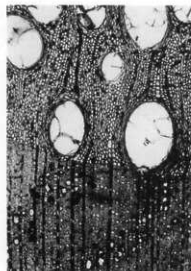
8a. ヤナギ属 根材 ISF-3297 C×40.



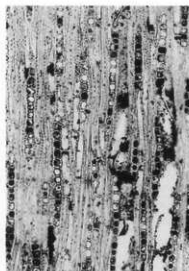
8b. 同 T×100.



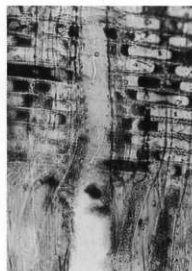
8c. 同 R×200.



9a. クリ ISF-3310 C×40.



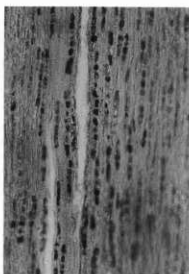
9b. 同 T×100.



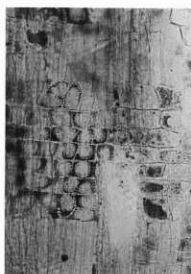
9c. 同 R×200.



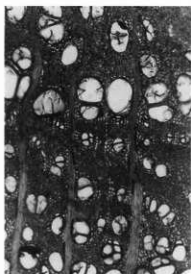
10a. スダジイ ISF-3294 C×40.



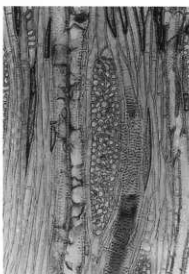
10b. 同 T×100.



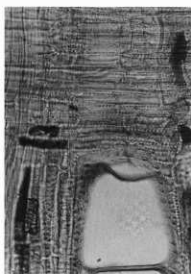
10c. 同 R×200.



11a. ヤマグイ ISF-3315 C×40.



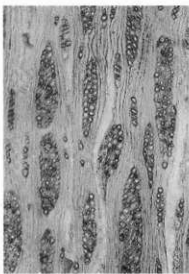
11b. 同 T×100.



11c. 同 R×200.



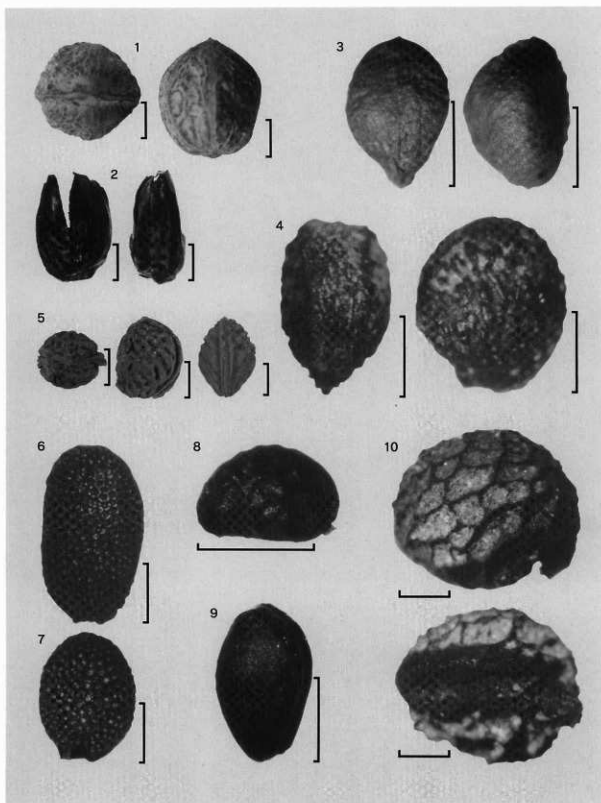
12a. カニデ属 ISF-3307 C×40.



12b. 同 T×100.

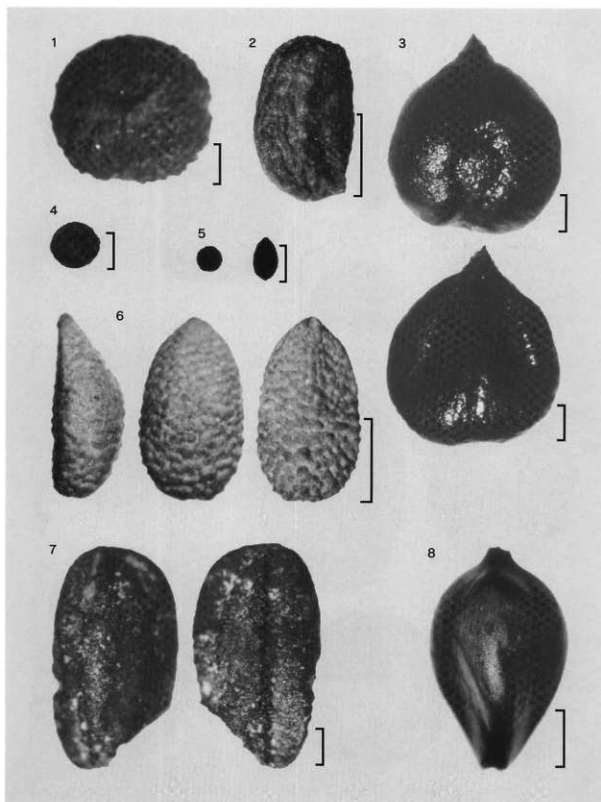


12c. 同 R×200.



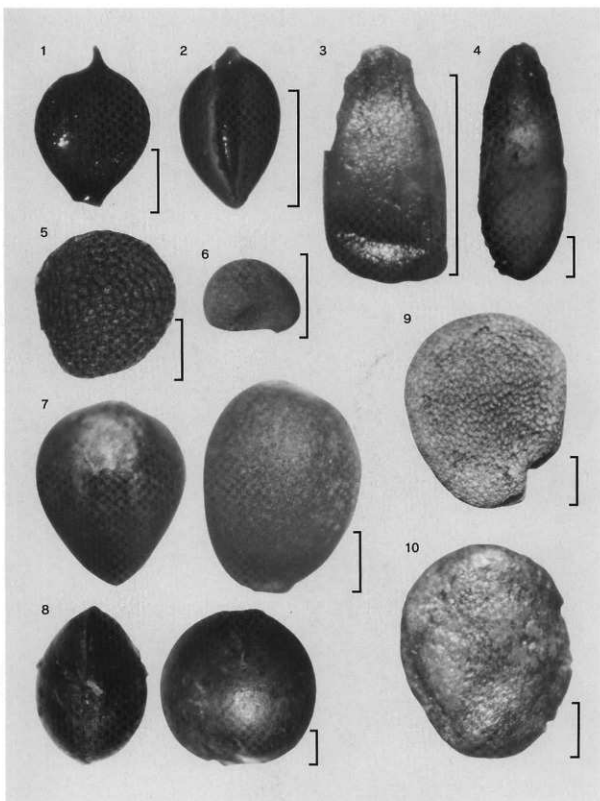
出土した大型植物化石(スケールは1mm、1、2、5は1cm)

- 1.オニグルミ、核 2.コナラ属コナラ亜属、果実破片 3.クワ属、種子  
 4.カジノキ、内果皮 5.モモ、核 6.マタタビ属、種子 7.マタタビ属、種子  
 8.キイチゴ属、核 9.イイギリ、種子 10.カラスザンショウ、内果皮



出土した大型植物化石(スケールは1mm, 4, 5は1cm)

- 1.アカメガシワ、種子 2.タラノキ、内果皮 3.ブドウ属、種子  
 4.トチノキ、種子 5.エゴノキ、内果皮 6.ニワトコ、種子  
 7.イネ、炭化胚乳 8.ウキヤガラ、果実



出土した大型植物化石(スケールは1mm、3は1cm)

1. スゲ属A、果実 2. スゲ属B、果実 3. ヒョウタン仲間、種子 4. メロン仲間、種子  
5. ナス属、種子 6. ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属またはキジムシロ属、内果皮  
7. アサ、炭化種子 8. カナムグラ、種子 9. ナス、種子 10. ミツガシワ、種子

## 金沢市下安原海岸遺跡

—金沢海岸災害復旧工事に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書—

用紙（中性紙） 表紙：215kg（レザック）  
本文：46.5kg  
写真図版：135kg（コート質）

---

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月28日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター  
石川県金沢市米泉町4丁目133番地  
〒921 電話 (0762)43-7692

印刷 株式会社栄光プリント

---